

# 中期旧石器時代の剥片剥離技法

——レバノン国ケウエ洞穴遺跡の石核群分析——

[上] 所謂「ムスティエ技法」に関連して

安 齋 正 人

## はじめに

中期旧石器時代の剥片剥離技法を代表する「ムスティエ技法」・「ルヴァロワ技法」は、F・ボルドの定義によく表現されている (Borde, 1950; 1953; 1961)。だがこのことから逆に、これら2つの剥片剥離技法がボルドの定義そのものであるかのように受け取られている。ボルドの定義こそが確かに両技法認定の重要な基準であったことに異論はない。この定義に基づいた統一概念に依拠しつつ、世界各地の中期旧石器時代に属する石器群分析に彼の同世代・次世代の研究者たちは成果を挙げてきた。当該両技法の発生契機や技法の実態などが各人各様に考えられていたボルド以前の渾沌とした研究情勢を脱するには、バラバラの基準を斥け、厳しく典型例を揃えて概念化した方が有利であった。

ところが反面でボルドの定義は、西欧の一角で知られた事実からのみ設定された仮説的・模式的方法と表裏一体をなしている。したがって地球規模で鳥瞰してみると、さまざまな組合せの石器群に伴って広汎な地域に長期に亘って繰返し現われた、人類の技術発達史上重要な意味をもつこれらの技法でさえも、ボルドの定義に叶うようにその特徴を典型的にそろえた石核として顕在する地域は自から限られてこよう。それにもかかわらずその形状は、どこでもボルド流に共通で画一的にとらえられ、形状の整った典型例が存在するときだけ選択的に報告されているにすぎない。筆者自身も、この点に関して例外ではなかった。当該技法による剥離工程の各段階ごとに石核上に刻まれる諸々の形状を、最終的にセットで具備していることをもって「典型」例とし(安齋, 1977; 1979)、東西両アジアの先史文化を比較する時にはその存在を目安の一つにするつもりでいた。言い換えれば、「ムスティエ技法」・「ルヴァロワ技法」によると認定できる個体は、例えば日本に於ても、極めて形状の揃ったもの、定義通りの典型的なものをピックアップすべきであると考えていた。

ところで、従来の技術形態学的視点からみた両技法の概念と定義についても、それで十分かといえれば決してそうではなく、それ自体がなお十分明瞭でない(安齋, 1977; 松沢, 1979)。今日一般に使われている「ムスティエ技法」・「ルヴァロワ技法」の用語法には、つきつめていえば、西欧、

殊に遺跡分布の稠密な、旧石器時代研究の中枢部であったフランスの一地方に於いて、ボルドの研究によって明らかにされた地域性の事実から抽出された現象的・固定的・閉塞的概念が内包されているのである。西欧を離れ、西アジアを通過し、西を向いていた視線を転じて、分布の稀薄な中央アジア・シベリアなどの周縁地帯や、東アジア・日本など分布の可能性が時折り指摘される更に遠隔地、つまり当該技法の発生契機としては、外部からの情報伝達による技術革新が考えられる地域に視座をすえてみると、ボルドの概念と方法ではもはや包括しきれないほどに多様な地域的問題が生じていることに気づく(岡村, 1977; 岡村・鎌田, 1980; 加藤, 1966; 1967; 1970; 1981; 西部, 1978)。また、資料を実際に整理分析してみると、ある技術系を具現している個々の石核の形状は極めて多様化・非典型化していることにも気づく。それは、第一に時間差を示し、第二に地域差を示し、第三に個人差を示している。「ルヴァロワ技法」がいつとき盛行したナイル流域に於ては、時の経過につれてその技法はさまざまに派生・変遷を重ね、“同一技術系内の異形”を生みだした。ヌビア地方のハルファン=インダストリーに伴うハルファン型石核とエピ=ルヴァロワ=インダストリー中の石核類は(安齋, 1979; Marks, 1968), 前者がルヴァロワ技法の発展精密化した姿であろうし、後者が退行・単純化した姿であろう。一定地域内の遺跡間についてみても、“同系”の範疇の外に出るものではないが、その立地——良質石材の産出地や水場などからの距離差——によって石核調整作業に精粗差が生じたため、一見しただけではまったく別種と思われる石核を残している例が報告されている(Munday, 1976)。同一遺跡内の個々の石核の場合も、すべて“バラツキ”の範囲内におさまるときでさえ、職人芸をおもわせる技術的手腕や作業中の集中力を示す優良品と、無器用で稚拙な技術のため特徴のない粗悪品とが混在している(第Ⅲ章以下参照)。だとすれば、従来、模式的典型的固定的にとらえられてきた当核両技法も、その実態は、時間の経過・空間の拡散の中で変化し、非典型化したため、「ムスティエ技法」・「ルヴァロワ技法」が当初から非典型的な姿で現われる石器群もありうるわけである。この技法に関しては辺境に位置するシベリアや日本などの地域では、最初から典型形状の目立たない、不全型としての表現が考えられるわけである。典型例は氷山の一角で、その底辺に多数の不全型が存在することを考慮しなければならない。

さて、上に述べたような視点から非典型例や不全型例までとりあげて、剥片剥離工程の実態を明らかにした研究は従来皆無に等しい。筆者の知るところでは、合衆国ダラスの南メソジスト大学の研究者たちがナイル流域とネゲブ砂漠で、片や剥離技法の時期ごとの変遷を(Wendorf, 1968), また片や遺跡間にみられる石核調整段階の差異(Marks, 1976)を解明するのに試みた石核細分がある。ただしこれらの細分では、列挙されている石核類型のいくつかは、同一技法の異なる調整段階のものを重複して類別した可能性がある。そうした可能性がおこることには、渡辺仁教授といっしょにケウエ洞穴の石核類を整理しはじめてすぐに気がついた。それ以来、同一技法の調整段階を異にする例や不全型例の存在ということ念頭に置いて、ケウエ洞穴の石核分類とともにそれ以東のアジアの資料収集に着手してきた。各地に一点一点拾いあげてまわること、それは極めて非能率的作業であるが、最も確実な方法である。だが、特定の石核群からはぐれた個体例をあつかう段にな

ると、当核技法の非典型例・不全型例とそれとは異系の技法による類似の調整石核とを見分ける確かな方法と鑑識眼を身につける必要にせまられる。以上がケウエの石核類を再分析しなければならなかった第一の理由である。

更にもう暫く本論の底流にある問題意識を述べてみよう。東西両アジアの先史文化比較研究の一環に於いて「ムスティエ技法」・「ルヴァロワ技法」をとらえようとする観点から云えば、純粋に技術形態学的範疇から脱皮し、技法発生の契機と発展、伝播と変容の過程など史的動態を究明するためには、既設の概念と方法とでははなはだ不十分である。めざすべき研究方向の好例がある。南アフリカの下部旧石器文化として、かつて、ステレンボッシュ文化とフォアスミス文化を提唱したC. ヴァン＝ライエット＝ロウは、それらハンドアックス・クリーバー石器群に伴う剥片剥離技法を発展段階的にとらえて、ルヴァロワ技法の発生と展開過程を、良質石材を求める地域開発行為の成果と照応させて説明した (van Riet Lowe, 1945)。しかしこの方向での研究はここで中断し、その後は専ら石核の形態や技術的所見に注意が向けられ、同等の精力が両技法の通時的・共時的展開とその背景解明に払われることは殆んどなかった。発生の背景や多様な変容の過程を踏まえ、人類の行動様式生活様式と密着した技術革新であるという認識にもとづく広範で包括的な概念を構築する努力が払われないかぎり、「ムスティエ技法」・「ルヴァロワ技法」が内蔵している人類史的情報を十分に抽出することはできないであろう。真の比較論的概念と方法とは、特定地域で確立された厳密そうな定義にもとづいた狭義の概念でもって、対象遺物が規範の技法に該当するかどうかを論議することではない。事実立脚しながら新しい事態に対応できる、ダイナミックな開かれた概念でなければならない。概念を固定化し、その枠の中で「ムスティエ技法」・「ルヴァロワ技法」をみることは真の比較考古学の方法ではないであろう。それは、将来の研究に対する目的を含み、且つ一つの展望を切り拓く概念と方法でなければならない。本稿はそれを模索する筆者の基礎作業である。

## 第I章 ケウエ洞穴遺跡の概要

ケウエ洞穴は、レバノン第二の都市トリポリの南西10km余の地にある。東京大学西アジア学術調査団による1967年のレバノン・シリア旧石器時代遺跡一般調査のおりに発見され (Suzuki and Kobori, 1970)、次いで現北大北方文化研究所教授・渡辺仁氏の指揮のもとで1970年に発掘調査が行なわれた (Watanabe, 1970)。この遺跡から出土した石器類はすべて中期旧石器時代に属し、D. A. E. ギャロッドの謂う「ルヴァロワゾ＝ムステリアン<sup>1)</sup>」の石器群である (Garrod and Bate, 1937)。遺跡は、洞穴というより岩陰と呼ぶべき形状を呈し、張出した岩の下で奥壁方向に急傾斜で下降する「上位地区」と、その前方部に展がる平坦な「下位地区」とから成る。下位地区の試掘溝 (8・6—8・9区) で層位を確認後、7・6—7・7区に拡張され、同時に上位地区にも発掘区 (5・3—5・4; 6・3—6・4; 7・3—7・4; 8・3—8・4区) が設けられた。下位地区で現地表下2.45m、上位地区で1.90mまで掘り下げられたが、いずれも基盤に到っていない。6つの層が確認されたが、

試掘溝では上層部の分層化が困難だったため、Ⅱ層、Ⅲ層を一括してⅡ／Ⅲ層とし、また下層部（Ⅳ—Ⅵ層）の発掘は試掘溝内のみに限定された。

第Ⅰ層：碎石混りの褐色ローム層

第Ⅱ層：黄褐色ローム層

第Ⅲ層：碎石及び石灰岩細粒混じりの褐色シルト質硬ローム層

第Ⅳ層：丸石混じりの赤褐色粘質ローム層

第Ⅴ層：石灰岩混じりの緑色シルト質粘土層

第Ⅵ層：灰褐色シルト質粘土層

第Ⅰ層からⅣ層までが石器包含層である。技術形態からみてすべて同一のインダストリーに属すると考えられる。石核の各層位別出土数は、第Ⅰ層が約100点、第Ⅱ層40点、第Ⅲ層200点、第Ⅱ／Ⅲ層50点、第Ⅳ層が数点である。

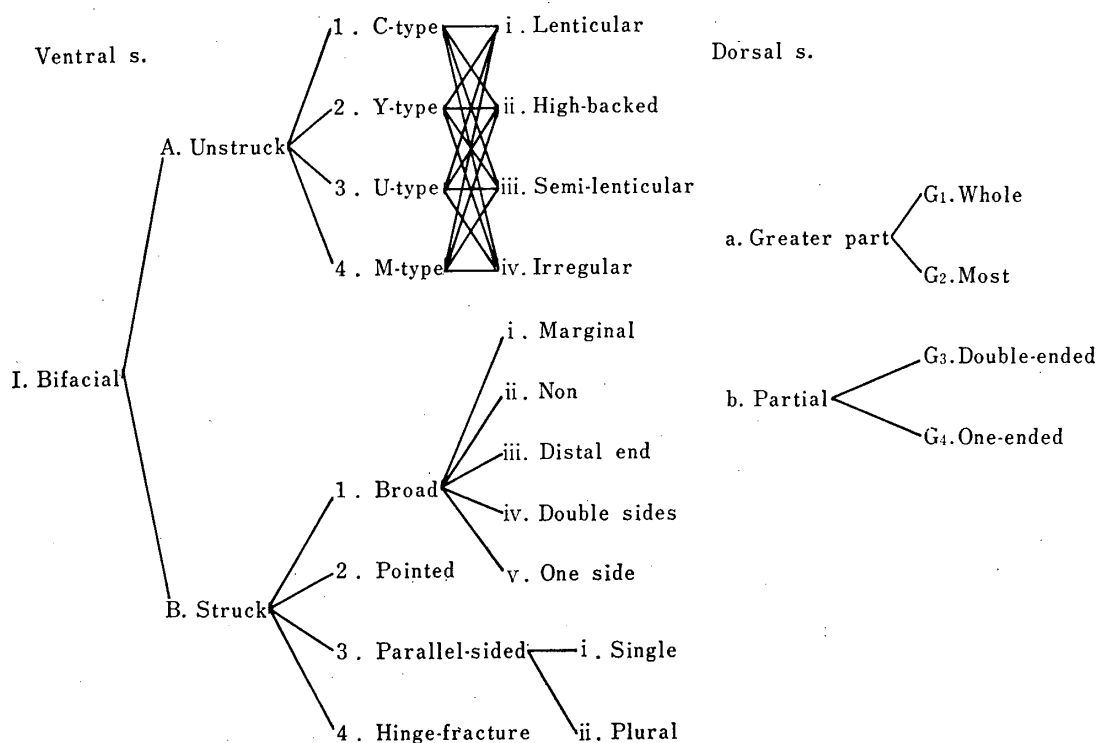
## 第Ⅱ章 ケウエ洞穴出土石核の分類法

ここに採用した分類システムは以前に発表したもの（安齋，1977）を下敷きにして若干修正を加えたものである（図表参照）。

### 分類過程

第1段階：採集石核類を調整加工の多寡・工程進度に応じて、Ⅰ．両面加工石核、Ⅱ．腹面調整だけの石核、Ⅲ．球状石核、Ⅳ．萌芽的・初源的調整加工の礫と石塊、Ⅴ．粗割りの礫と石塊、Ⅵ．

表1 ケウエ洞穴出土石核分類システム





未加工の礫と石塊、に大別する。

第2段階：腹面の処理法を基準にして I (Bifacial) の石核群を二分する。すなわち、A (Unstruck). 単一の主剥片剥離がみられず、腹面には複数の剥離痕が残る一群と、B (Struck). 単一あるいは時に2枚の目的主剥片剥離がみられる一群である。

第3段階：背面の調整法とその程度を基準にして上記AとB各石核群を更に二分する。すなわち、a (Great). 背面の調整剥離が連続的に半周以上に亘る一群——これは更に G<sub>1</sub> (Whole). 全周に及ぶもの、G<sub>2</sub> (Most). 一部に未調整部分を残すもの、に細分できる——と、b (Partial). 背面の調整剥離が半周に満たない一群——これも更に G<sub>3</sub> (Double-ended). 調整が両端に施されたもの、G<sub>4</sub> (One-ended). 調整が一端に限定されたもの、に細分できる——である。

第4段階：再び腹面の形状に注目してA群の石核を四分する。すなわち、1 (Centripetal). 剥離痕が求心状を呈するC型、2 (Y-shaped). 剥離痕がつくる稜がY字状を呈するY型、3 (Uni-or Bi-directional). 剥離が同一方向または対向に行なわれるU型、4 (Miscellaneous). 上記のいずれからも外れる剥離の粗雑なM型、である。B群の石核は主剥離痕の形態によって四分する。すなわち、1 (Broad). 円形あるいは楕円形、2 (Pointed). 三角形あるいは木葉形、3 (Parallel-sided). 縦長の両側平行形、4 (Hinge-fracture). 剥離に失敗した例である。

第5段階：Aの上記4群のそれぞれに於て横断面形を基準にして更に細分する。i (Lenticular). 凸レンズ形または凸平形、ii (High-backed). 高背形、iii (Semi-lenticular). 半凸レンズまたは半凸平形、iv (Irregular). 不定形。また、B—1群は腹面調整剥離痕の残存状況とその位置を基準に細分する。i (Peripheral). 周縁、ii (Non). 残存せず(腹面全体を単一の主剥離痕が占める)、剥離方向を軸として、iii (Distal-end). その遠端、iv (Double sides). その両側、v (One side). その片側。B—3群は主剥離痕の数によって細分する。i (Single). 単数、ii (Plural). 複数。

最終段階：第5段階までに細分された各小群の個体ごとに、計測(長・幅・厚・比高・重)、材質同定、原礫面の存否、輪郭(円形・楕円形・三角形・矩形・長方形などの幾何学形)、背面調整剥離の性質(周縁剥離・面的剥離)、打角、使用痕の有無、等々をチェックする。

### 第Ⅲ章 A群——所謂「円盤形石核」——の細分

A群石核98点の類別個体数は別表の通りである。以下、各類型ごとに詳述していくが、紙数の関係から説明不要のものは省略する。

#### [A-a-l-i-G<sub>1</sub> 及び G<sub>2</sub>]

この一群の石核は次の諸属性を共有する(以下の項ではこの文は省略)。

- 1) 腹面には単一の大型剥離痕はなく、複数の求心状剥離痕がみられる。
- 2) 背面調整は半周以上に亘って施される。これは更に周縁全体に加工が及ぶもの(G<sub>1</sub>)と、部

分的に未加工部を残すもの (G<sub>2</sub>) に分れる。

3) 横断面は凸レンズ形または凸平形を呈する。

個体総数26点でA群の中心的位置を占める。背面調整が周縁全体に及ぶ例が多く(17点), 周縁の一部に未加工部を残す例(9点)のほぼ倍の数である。前者 G<sub>1</sub> 群の17点の層位別内訳をみると, 第 I 層 5 点 {7-7-43<sup>2)</sup>; 8-3-7; 8-7-24(図の①); 8-9-22; 8-9-37(②)}, 第 II / III 層 2 点 {8-7-24; 8-9-63(③)}, 第 III 層 10 点 {5-3-39; 5-3-125(④); 5-4-149(⑤); 6-3-31; 6-3-84(⑥); 6-3-121; 7-3-108; 7-4-19(⑦); 8-3-80; 8-4-76(⑧)} である。後者 G<sub>2</sub> 群の 9 点の層位別内訳は, 第 II 層 1 点 {6-3-23(⑨)}, 第 II / III 層 1 点 {8-7-53(⑩)}, 第 III 層 7 点 {5-3-102; 5-4-34; 5-4-167; 6-3-134; 6-4-159; 7-3-50; 8-3-90} である。

ケウエ洞穴出土の石核類は全体に極めて小型である。この一群中の最大例(6-3-23)は, 6.8×4.7×2.7cm, 比高値0.40で他の遺跡では通常の大さきであるが, ケウエでは最大の部類に入る。最小例(8-9-37)は, 2.7×2.7×1.0cm, 比高値0.37である。比高値0.50以上の厚型石核は6点と少なく, 圧倒的に(20点)薄型であり, 0.30以下の超薄型石核が6点も含まれている<sup>3)</sup>。これらは腹面の調整・剝離に手間をかけていて, 剝離痕は細かく数も多い。

背面調整と輪郭の関係をみると, 背面調整が全周に及ぶ例は一般に加工が丁寧なためよく丸味を帯びているが, 部分的に未加工部を残す例は, 加工が雑で角張った感じが残る。背面の調整剝離が中央部まで及び, 面的広がり(surface)をみせる例は僅かにすぎない。この特徴は素材の背面が高く隆起する形状と関係するようである。他の例はすべて剝離が周縁に限られ(marginal), 背面中央には原礫面・節理面・破砕面などを残している。背面周縁の一部に一次調整痕の他に更に腹面に対してほぼ垂直に剝離を加えて, 特別な打面を形成したり, あるいは形成しようとした例が目につく(G<sub>1</sub>に8点, G<sub>2</sub>に3点)。この中にはB群——所謂「亀甲形石核」——, 換言すれば, ルヴェロワ技法に於ける目的剝片剝取用打撃を加える直前の例が含まれる可能性が高い。使用痕とみられる粗い刃こぼれを残す例も8点ある。

フロントの角礫や小石塊を用いている例が11点, 円礫を用いている例が15点で, 前者には原礫面を残すものが少ないが, 後者は例外なく背面に原礫面を残している。

表2 A (Unstruck) 群石核類別個体数

		a		b			
		G <sub>1</sub>	G <sub>2</sub>	G <sub>3</sub>	G <sub>4</sub>		
1 (C)	i	17	9	12	11	49	72
	ii	2	2			4	
	iii	1	3	2	1	7	
	iv	1	8		3	12	
2 (Y)	i		2		1	3	5
	ii				1	1	
	iii						
	iv		1			1	
3 (U)	i		1	3	1	5	9
	ii		1		1	2	
	iii				1	1	
	iv				1	1	
4 (M)	i				5	5	12
	ii		1	1		2	
	iii		1			1	
	iv	1		1	2	4	
		22	29	19	28		
		51		47			
		98					

### 中期旧石器時代の剝片剝離技法

G<sub>1</sub> 群の石核は G<sub>2</sub> 群と比べて背腹両面の調整加工が丁寧で細かい。所謂“discoidal cores”の典型例を多く含んでいる。輪郭が三角形(8-9-37)と長方形(5-3-39)の例を1点ずつ含むが、他はすべて円形か楕円形を呈し、また前2例にしても角張りは少なく丸味を帯びている。背腹両面の区別が判然としない例がある。7-7-43例では腹面中央に平坦な原礫面を残したまま剝離調整が未完のうちに途中で放棄され、替って同面の一端に細かい階段状剝離を重ねて、本来の背面に対してほぼ垂直の打面を形成している。A群に配属したが、主剝片剝離の打撃を加える直前を示す例であるかもしれない。5-3-39例も背腹両面の区別がつけにくい。両面ともに中央に平坦な原礫面を残していて、その各面にそれぞれ垂直に近い打面が直角の位置関係で2箇所形成されている。恐らく両面から目的剝片を剝取しようとしたものであろう。図の①はケウエの石核中最大の部類に属する優良品で、背面調整・打面調整・腹面剝離のいずれの剝離技術も細かく丁寧で、ボルドの所謂「ムスティエ技法」を典型的に具現している。②はB群の石核を再調整したもののようである。再調整剝離は薄く並列的で整っている。その縁辺に細かい使用痕が残っているところをみると、最終的には削器として利用されたようである。③は比較的整った円盤形石核である。④は多少大きめの石核で剝離は粗い。腹面に一次打割面を残す調整初期段階の例である。⑤は整形の美しい石核で、注意深く調整された打面から連続して薄い縦長の小剝片が剝離されている。次号で述べる[B-a-3-ii] (複数の目的縦長剝片剝取) 群に近似する石核である。⑥と⑦も典型的な円盤形石核の優良品である。⑧は極めて薄い(0.8cm)石核であるが、常法通りの剝離が施されている。

G<sub>2</sub> 群石核の輪郭も三角形に近い例(6-3-134)と矩形(8-7-53)の2点を除いて7点は円形あるいは楕円形である。これらも従来、所謂“discoidal cores”として一括されてしまう石核であるが、ここでは更に内容を細かく検討してみよう。図の⑨は石核としての調整途中でチャップパーに用途変更されてしまったらしい。鋭角で直線状の側面に細かい剝離によって刃部が作出されている。⑩を含めた前述の超薄型石核3点はいずれもその腹面の剝離痕が小さく、通常いわれているように目的剝片を剝取し続けて消耗し尽した残核である、とは考えられない。だからといって、ルヴァロワ技法による細かな腹面調整の最終段階を示す例であって、残すは目的主剝片剝離用の一撃だけである、とも断言できない。ただし一例(8-3-90)だけは、一端の背面調整痕上に更に細かく打面調整が施されていて、ルヴァロワ技法による最後の調整段階にあり、何らかの理由で放棄されたものである、と云えよう。5-3-102例は明らかにB群石核の再調整品であって、腹面左半分には背面の調整痕と原礫面とが作る稜上を加撃して剝取した目的剝片の剝離痕が残り、この旧剝離痕を切って右半分には、腹面に残る突出部を除去し平坦に整形するために施した小型の階段状剝離が重複してみられる。同様に突出する腹面を平らに均すために階段状剝離が意図的に用いられた例がもう1点(5-4-34)ある。5-4-167例はボルドの「ムスティエ技法」をよく表現している。つまり、腹面には調整用の小剝離痕ばかりでなく、相互に切り合う更に大型の3つの目的剝片剝離痕<sup>4)</sup>が残されている。

[A-b-1-i-G<sub>3</sub>]

- 1) 腹面には単一の大型剝離痕はなく、複数の求心状剝離痕がみられる。
- 2) 背面調整は部分的で<sup>3)</sup>、かつ両端に施されている。
- 3) 横断面は凸レンズ形または凸平行形を呈する。

所属個体数12点。その層位別内訳は、第Ⅰ層が3点 {5-3-11; 5-3-14(図の⑪); 7-7-7}、第Ⅱ層1点 {7-6-69}、第Ⅱ/Ⅲ層2点 {8-8-48; 8-8-51(⑫)}、第Ⅲ層6点 {5-3-64; 5-3-66; 5-4-144; 6-3-132; 7-4-75(⑬); 8-4-40(⑭)} である。この一群の最大例 (8-8-48) は、4.1×3.3×1.6cm、また最小例 (8-8-51) は、2.8×2.2×1.4cm で他はすべてこの範囲内に入る。厚型の石核は3点だけで、9点が薄型である。図の⑪は腹面の一端に一次打割の際の打瘤を留めた礫剝片を素材とした超薄型 (比高値0.26) の石核である。

フロントの角礫を用いたものが3点で、そのうち2点は多少原礫面を残す。他の9点は円礫を素材としていてすべて背面に原礫面を残している。

円形あるいは楕円形の輪郭をもつ例は半数以上の7点あるが、G<sub>4</sub> (一端調整) 群の薄型石核と比べると輪郭が粗い。他に半円形、矩形、隅丸方形が各1点ずつと、不定形が2点ある。矩形の石核の腹面には比較的大きな剝離痕が残っていて、次号で述べる [B-a-1-V] 群の石核に近似する。この石核の両端の打面は腹面に対して垂直に近い角度に調整されている。

この石核群にみられる背面両端の調整剝離は、限らずしも腹面の剝離に先だつ打面用調整ではない。例えば、5-3-11例では、腹面の剝離痕に対応する打点と背面両端の調整剝離の位置が一致しておらず、両端に調整剝離を限定した意図が明確でない。また図の⑫の背面一端に残る剝離痕の1つは、他の背面調整剝離と性質が異なる。深いネガティブ・バルブ、剝離痕の形と大きさなど腹面に一般的な剝離痕に類似する。5-4-144例の場合、一端には3つの剝離痕が平行に並び、うつくしい打面を形成しているが、他端の調整は腹面にほぼ垂直な一枚の平坦剝離面にすぎない。腹面剝離の際にこの面を何かに当てて加撃したのかもしれない。付近に衝撃によると思われる細かい不規則な剝離が生じている。

背面の調整剝離痕上に更に細かい剝離痕のみられる例は10点にものぼるが、打面調整用の特別な剝離と見做しうるのは4点だけである。そのうちの1点 (7-7-7) には両端に施されている。その他の6点は使用痕か偶発的剝離痕である。石核の周縁に連続した細かい使用痕を残す例が3点ある。5-4-144例の場合、石核としての調整が未完のうち、前述したうつくしい打面部を修整して小型のチョッパー・チョッピングツールに類似する刃部が作出してある。図の⑪背面にみられる大きな剝離痕の薄い縁辺部に比較的明瞭にリタッチが加えられている。⑭の場合も一端を加工して削器あるいは楔状の刃部に作りかえている。他に粗い刃こぼれをもつものも2点ある。

[A-b-1-i-G<sub>4</sub>]

- 1) 腹面には単一の大型剝離痕はなく、複数の求心状剝離痕がみられる。

### 中期旧石器時代の剥片剥離技法

2) 背面調整は部分的で、しかも一端に限られる。

3) 横断面は凸レンズ形または凸平形を呈する。

個体総数11点。その層位別内訳は、第Ⅰ層5点 {7-4-4; 7-6-28; 8-3-19; 8-4-24(図の⑮); 8-6-28(⑯)}, 第Ⅱ/Ⅲ層2点 {8-7-49; 8-9-126(⑰)}, 第Ⅲ層2点 {5-3-89; 8-4-44(⑱)}, 第Ⅳ層2点 {8-9-130; 8-9-133} である。最大例(7-4-4)は、 $4.0 \times 3.9 \times 1.9\text{cm}$ 、最小例(8-9-133)は、 $2.4 \times 1.9 \times 1.2\text{cm}$ で、厚型石核は3点にすぎず、8点が薄型である。加工の良好な薄型の石核に比べて厚型のもは一般に調整加工が粗く、腹面の剥離痕や輪郭も不規則・不定形になる傾向はすべての石核群を通してみられる。

角礫と円礫は3対8の比で後者が多く用いられ、それらはすべて背面に原礫面を残している。

輪郭をみると、円形あるいは楕円形の石核が7点と多い。これらは全体に加工が良く背面調整が一端にのみ限定されているが、この点を除けば所謂“discoidal cores”に類似する。図の⑯の腹面下半部は破損している。残余の剥離痕から推定してC型に分類したが、別の可能性も残る。⑰はこの一群中の典型例で、特に細心な調整加工が施されている。他に矩形が2点、三角形と不定形のもが各1点ずつある。⑮は矩形の例には珍しく、背腹両面とも細心の注意を払って上手に加工されている。

背面の調整剥離痕上に更に細かい剥離痕がみられる例が7点ある。このうち腹面から主要剥片を打剝するために特別な打面調整を施した例、言い換えると、[B-a-1]型石核の調整最終段階を示していると考えられる例が4点ある。他の3点は打面調整用剥離痕というよりも使用痕である可能性が大である。石核の周縁に、ある長さ亘って連続した細かい剥離を残す例が3点ある。その中の1点(8-3-19)の該当部は細かい階段状剥離が重なり、意図的に作出された削器用刃部と解釈できる。他に刃こぼれとみられる不規則な欠痕をもつものも3点ある。

#### [A-a-1-ii-G<sub>1</sub> 及び G<sub>2</sub>]

1) 腹面には単一の大型剥離痕はなく、複数の求心状剥離痕がみられる。

2) 背面調整は半周以上に亘って施されている。これは更に周縁全体に加工が及ぶもの(G<sub>1</sub>)と、部分的に未加工部を残すもの(G<sub>2</sub>)に分れる。

3) 背面は中央に高く稜がはしり、横断面が三角形を呈する。

所属個体数は4点で小さな一群である。G<sub>1</sub>とG<sub>2</sub>は半数ずつの2点である。G<sub>1</sub>の2点は第Ⅰ層(8-8-29)と第Ⅲ層(5-3-129)、G<sub>2</sub>の2点は第Ⅰ層(8-9-16)と第Ⅱ/Ⅲ層{8-6-36(図の⑲)}出土である。最大例(8-8-29)は、 $4.7 \times 4.2 \times 2.9\text{cm}$ 、最小例(5-3-129)は、 $2.8 \times 2.7 \times 2.0\text{cm}$ で、他の2点の最大径も3cm代におさまってしまう。ただしいずれも厚みがあって比高値はすべて0.6以上を示す。

背面の剥離が周縁部に限られる例が1点だけで、他の3例の剥離は背面の中央まで面的広がりを見せる。この種の面的調整剥離は薄型の石核には稀れで、厚型の石核に増加し、高背の石核で専ら

となる傾向が認められる。

4例とも角礫を用いており、稜線で二分された背面の片側に平坦な節理面を残す例も混じる。

この一群の石核の輪郭は原石の形にはほぼ準じていて、楕円形が2点、他はそれぞれ長方形と矩形に近い。いずれも調整加工は粗く、全般に粗雑な石核であるが、腹面は常法通り全面が求心状の剝離痕で覆われている。図示例の腹面の形状は、この石核が次号で詳述する〔B-a-1〕群の石核を再調整したものであることを表わしている。5-3-129例はその一端が腹面に対して垂直な平坦面になっていて、形態的には次に記述する〔iii〕（半凸レンズ形あるいは半凸平形）の石核との折衷形をなしている。

これらの石核の中には背面整形の一部に高背形搔器を髣髴させるものがあり、使用痕が残ることからもそうした機能も兼ねていたと考えられる。

〔A-a-1-iii-G<sub>1</sub> 及び G<sub>2</sub>〕

1), 2) は前群と同じ。

3) 横断面は半凸レンズ形あるいは半凸平形を呈する。

この一群も所属個体数が4点と少ない。この石核の指標の一つ、周縁の一部を断つ腹面に殆ど垂直な平坦面は、石器製作者によって意図的に作出されたものではなく、専ら素材元来の形態に由来している。こうした形態の石材が意図的に選択されたものかどうかは、資料が少なく判断し難い。従って、〔iii〕という範疇のケウエの石核分類システムに於ける意味づけは留保しておく。

G<sub>1</sub> が1点、G<sub>2</sub> が3点あり、前者は第Ⅲ層 {5-4-182(図の②)}, 後者は第Ⅱ/Ⅲ層 (8-9-51) と第Ⅲ層 {5-4-180; 8-3-63(②)} 出土である。〔iii〕の石核は一般に周縁の一部をなす平断面には調整加工が施されないから、G<sub>1</sub> の1点は例外的である。背面の調整剝離は4点とも周縁部に限定されている。全点が角礫製で、うち1点だけ背面に大きく原礫面を残す。最大例 (8-9-51) は、5.3 × 4.3 × 1.5cm, 比高値0.28でケウエでは大型の部類に入る。最小例 (5-3-180) は、2.6 × 2.7 × 1.4 cm, 比高値0.52の厚型の石核である。

輪郭をみると、矩形 (5-4-180) の1点を除き他は円形あるいは楕円形である。矩形の例も G<sub>1</sub> 例同様平断面にも調整剝離が加えられているが、ここを打面とする腹面剝離は他の諸例同様行なわれていない。しかし、この例の腹面剝離の切り合いはかなり複雑になっている。全体に前述〔ii〕の5-3-129例に類似するが、「背面の稜線」よりも「腹面に垂直な平断面」という特徴が強いので〔iii〕に配属した。図の②は上述のように平断面部分に大きな剝離痕があるため、この面が腹面に対して垂直にはなっていない。背面の調整剝離は良好で、この一群中最も整形が良い。残り2点は共に腹面の一部に一次打割面を残している。

〔A-b-1-iii-G<sub>3</sub> 及び G<sub>4</sub>〕

1), 3) は前群と同じ。

### 中期旧石器時代の剥片剥離技法

2) 背面調整は部分的で、両端 ( $G_3$ ) か一端 ( $G_4$ ) に施されている。

個体総数はわずか3点で、 $G_3$  が2点 {6-3-102; 7-4-23(図の㉔)},  $G_4$  が1点 (5-4-131), いずれも第Ⅲ層出土である。図示例は、 $4.1 \times 3.5 \times 1.6\text{cm}$ , 比高値0.39の薄型, 他の2点は厚型の石核である。6-3-102例が円礫を用いていて, 片側の平坦面に原礫面を残している。他の2点は角礫製である。

輪郭をみても、この一群の石核は周縁を断截する由来不明の打割面あるいは平坦な原礫面をもつため、輪郭は半円形またはそれに近い形を呈する。背面調整部を上・下の方向に位置づけると、腹面にほぼ垂直なこの断面は側部に位置する。一般にこの部分は未加工のまま残され、ここを打点とする腹面剥離もみられない。図の㉔はこの一群の代表的例である。6-3-102例の場合は、該当の平坦原礫面が比較的小さく、しかも一部破碎して [i] (凸レンズ形) 群に近い形になっている。

$G_3$  の2例には、背面の調整剥離痕上にさらに細かい剥離痕がみられるが、特別な打面調整用剥離と見做すほどの特徴はない。図の㉔の腹面右側縁に細かい加工痕がある。他の2例の縁辺にも使用痕らしい粗い縁欠けがみられる。

#### [A-a-1-iv- $G_1$ 及び $G_2$ ]

- 1) 腹面には単一の大型剥離痕はなく、複数の求心状剥離痕がみられる。
- 2) 背面調整は半周以上に亘って施されている。
- 3) 横断面 (及び輪郭) は不定形を呈する。

所属個体数は9点で比較的多い。 $G_1$  (全周調整) の1点 (6-4-49) は例外的で、他の8点は  $G_2$  (一部未調整) に属する。前者は第Ⅲ層出土。後者8点の層位別内訳は第Ⅰ層が1点 (8-7-19), 第Ⅱ/Ⅲ層1点 (8-9-69), 第Ⅲ層6点 (5-4-37; 6-3-116; 6-4-134; 7-4-16; 7-7-143; 8-3-45) である。最大例 (6-3-116) は、 $4.5 \times 3.9 \times 1.9\text{cm}$ , 最小例 (8-9-69) は、 $2.8 \times 2.3 \times 1.6\text{cm}$  で、他は最大径が4cm代のものは3点、3cm代が4点である。比高値が0.5以上の厚型石核は2点だけで、他は薄型に入るが全体に厚味のある石核が多い。円礫を素材にしている石核は3点で、これらはすべて背面中央に原礫面を残す。他の6点は角礫を用いている。

輪郭が楕円形に近い1点を除いてすべて角張った不定形の粗雑な石核群である。ただし7-7-143例や8-7-19例ではその一端にゆきとどいた打面調整がみられるし、6-3-116例には背面にも比較的大きい剥離痕と2条の薄い槌状剥離がみられるうえに、腹面は粗雑ながらボルドの謂う「ムスティエ型」の剥離状態を示している。この例だけは背面調整が面的剥離である。

削器または搔器として再利用されたと考えられる石核が3点ある。5-4-37例は該当部の大部分が折損して失なわれてしまったが、残存部をみると所謂「ムスティエ型剥離」によって角度の大きい搔器用刃付けが施されていたようである。6-3-116例の周縁数箇所にも粗い剥離で凹刃及び直刃が作出されている。6-4-134例にいたっては削器の範疇にも入れられるほどしっかりした直刃が、「ム

スティエ型剝離」によって4cmの長さに亘って作出されている。

[A-b-1-iv-G<sub>4</sub>]

所属値体数3点(図の㉓)。詳細は省略。

[A-a-2-i-G<sub>2</sub>]

- 1) 腹面には複数の剝離痕がY字状の稜を形成している。
- 2) 背面調整は半周以上に亘って施されているが、一部に未加工部を残す。
- 3) 横断面は凸レンズ形または凸平行を呈する。

所属個体数は2点にすぎない。第I層出土の7-7-4例は、2.7×3.6×1.0cm、比高値0.28の超薄型の石核、第III層出土の5-3-115例は、3.1×2.9×1.1cm、比高値0.35の薄型石核である。ともに円礫製で背面に原礫面を残す。

前者は三角形に近い輪郭である。背面には横方向で大きい旧剝離痕が残り、細かい特別な打面調整剝離が一部これを切って施されている。この打面からの数度にわたる腹面剝離はいずれも著しいヒンジフラクチャーに終っており、腹面下半部には2面の打割面がそのまま残っている。後者は角張っているが円形に近い輪郭である。[B-a-2](尖形主剝片剝離)群石核を再調整したもののようなものである。

[A-b-2-i 及び ii-G<sub>4</sub>]

- 1) 腹面には複数の剝離痕がY字状の稜を形成している。
- 2) 背面調整は部分的で、しかも一端に限られる。
- 3) [i]の横断面は凸レンズ形または凸平行を呈する。[ii]は背面中央に高く稜がはしり、横断面が三角形を呈する。

所属個体数は[i][ii]とも1点ずつにすぎない。いずれも第I層出土である(8-9-25;7-6-21(図の㉔))。8-6-25例は、3.6×4.2×2.4cm、フロントの円礫を用いた厚型の石核である。輪郭は円形に近い。腹面に形成されたY字状の稜が、三角形の目的主剝片を打剝するためにあらかじめ意図して調整されたものか断言できない。なぜなら打面部の稜をたたいた最後の一撃は、短小のヒンジ・フラクチャーに終っているからである。打面上に更に細かい剝離がみられるが、ボルドの云う特別打面調整と云えるものではない。図の㉔は、2.5×2.9×2.1cm、高背(0.72)の小フロント塊を用いた石核である。3面からなる背面の1面は原礫面のままである。楕円形の輪郭を示すが、一端に腹面に対して垂直な節理面をもつため、[iii](半凸レンズ形)群に近い形態となっている。腹面の稜は厳密にはY字状ではないが、稜を形成している剝離痕はいずれも三角形である。背面の一端は二重に剝離され、打面調整の意図が読みとれる。



[A-a-2-iv-G<sub>2</sub>]

- 1) 腹面には複数の剥離痕がY字状の稜を形成している。
- 2) 背面調整は半周以上に亘っているが、一部に未加工部分を残す。
- 3) 横断面と輪郭は不定形を呈する。

所属個体数は第Ⅲ層出土の1点 {5-4-191(図の㉕)} だけである。2.5×3.7×1.6cm, 円礫を用いた薄型の石核で、背面調整が面的剥離で行なわれていて原礫面の残りは少ない。腹面下半部は一次打割面のままで、Y字状の稜は偶発的なものかもしれないが、背面の調整状態から判断すると、図の右横方向からの打撃が予定されていた可能性もある。

[A-a-3-i 及び ii-G<sub>2</sub>]

- 1) 腹面の剥離は一端あるいは両端から同一方向または対向に施され、平行な稜が形成される。
- 2) 背面調整は半周以上に亘って施されているが、部分的に未加工部を残す。
- 3) 横断面は [i] 凸レンズ形または凸平行を呈する。[ii] 背面に高く稜線がはしり、横断面は三角形を呈する。

[i] [ii] とともに1点ずつにすぎない。両例とも定義上G<sub>2</sub>に配属しているが、実質的な打面と腹面の剥離方向を考慮すると、G<sub>4</sub>(一端調整)と見做すこともできる。前者(5-3-23)は第Ⅲ層出土。3.4×3.6×2.1cm, 円礫を用いた半円形に近い厚型の石核である。腹面の剥離状態は[B-a-3](縦長主剥片剥離)群に近い。背面にも比較的大きい三角形の剥離痕が残る。後者{8-6-30(図の㉖)}は第Ⅱ/Ⅲ層出土で、3.1×3.9×3.2cm, 高背(0.82)のフリント塊を用いている。輪郭は楕円形だが、腹面の剥離は長軸に対応する半周からのみ行われている。

[A-b-3-i-G<sub>3</sub>]

- 1), 3) は前群と同じ。
- 2) 背面調整は部分的で、かつ両端に施されている。

総点数は3点にすぎないのだが、[3](U型)群の他の亜群に属する石核がいずれも1点ずつであることに比べれば、この個数には実質的な意味を込めることができる。第Ⅰ層2点{7-7-34(図の㉗); 8-7-27}, 第Ⅲ層1点{6-3-67(図の㉘)}であって、前2例はフリントの角礫、後者は円礫を用いている。順次、2.7×3.8×1.9cm, 比高値0.50, 4.4×3.9×1.8cmで0.41, 3.2×2.8×1.8cmで0.56を計り、全体に厚味のある角張った輪郭をもつ。

図の㉗は縦長の方形で、長軸方向の一端の背面調整痕上に更に細かい調整剥離を加えて腹面に対し垂直な打面を作出している。この打面上を横に打点を移しながら、大中小3枚の小剥片を打削している。腹面右下半部には原礫面を残している。他端の背面剥離は粗雑で、しかもここからは剥片打削が行なわれていない(単設打面)。この石核は前出 A-b-2-ii-G<sub>4</sub> の7-6-21(図の㉙)に類似する。8-7-27例は背面に大きな剥離痕を残していて、[B](主剥片剥離)群の石核を再利用したこと

が知られる。この旧剝離痕を切って背面の一端に腹面に対しほぼ垂直な打面が調整されている。他端にも幅は狭いが垂直に近い打面が設けられ、両端から縦長剝片が打剝されている(両設打面)。図の㉘は中央に稜をもつ二面体を呈する一端に細工して垂直の大きな打面を調整している。他端の調整面は腹面と鋭角をなして打面とは考えにくい(両設打面?)。腹面底辺にみられる小剝離と細かい階段状剝離は、楔または搔器のように使用した結果かもしれない。

G<sub>3</sub>(両端調整)群石核の背面下端の調整部は打面として用いられることもあるが、両極打法の存在を暗示するものかもしれない。

[A-b-3-i~iv-G<sub>4</sub>]

- 1) 腹面の剝離は一端あるいは両端から同一方向または対向に施されるため、平行な稜を形成する。
- 2) 背面調整は部分的で、しかも一端に限られる。
- 3) 記載の便宜上、横断面形は4つのグループを一括している。

[i]~[iv]に属する石核はそれぞれ1点ずつで、順次、第Ⅲ層出土{7-6-93(図の㉙)}, 3.1×2.2×1.0cmのかなり薄い礫剝片を利用した石核。第Ⅰ層出土(8-9-33), 3.4×3.7×2.1cmの高背の石核。第Ⅲ層出土(5-4-183), 2.8×3.0×1.2cmの薄型石核。同じく第Ⅲ層出土{6-3-118(図の㉚)}, 3.3×4.3×1.3cmの薄型で横に長い石核。5-4-183例はフリの円礫を用い、一側に腹面とほぼ垂直な平坦原礫面を残す。他の2例は角礫を用いている。

図の㉙は楕円形の輪郭を示し、その一端から長軸方向に2枚の縦長剝片が打剝されている。ただしこれらは小型で腹面の上半部を占めるだけであって、下半分は第一次打割面を残す未調整部である。背面の調整部中、打点より右下にみえる細かい加工は、打面調整というよりも搔器様の刃部を偲ばせる。8-9-33例は不定多角の角張った輪郭をもつ。広い二面体の未調整打面から、打点を横に移しながら薄く比較的短い剝片を剝取している。打面の縁辺にみえる細かい剝離痕は打面調整用ではなく、これに対応する腹面上にヒンジ・フラクチャーが重複していることからみて、何度も繰り返された加撃のとき飛び散った細裂片の痕と考えられる。この例も腹面下半部が未加工のままである。5-4-183例は円形に近い輪郭をもつ。腹面の剝離痕の1つは比較的大きく、[B-b-2](三角形主剝片剝離)群石核に近い。風化による破損が著しい。図の㉚は不定形で背面が平坦な節理面である。腹面にみえる三角形の剝離痕は、背面の比較的大きい2枚の剝離面が作る稜線上加撃して剝取したもので、その大きさが腹面全体の半分に満たないという定義上の理由から[A]群に配属したが、[B](主剝片剝離)に入れても矛盾はない。ただし、腹面中央にはしる稜線の接する打面部には、更に細かい加工が施されていて、この後該当部に加撃して更に目的剝片を剝離しようとした製作者の意図が読みとれる。この打面部の細工は、調整用と見做す以外にも、刃部とすれば、その形態や剝離の特徴から彫器のような用途のためとも解釈できる。

[A-b-4-i-G<sub>4</sub>]

- 1) 腹面の剥離状態は粗雑で特徴に乏しく、C型・Y型・U型のいずれにも属さない。
- 2) 背面調整は部分的で、しかも一端に限られる。
- 3) 横断面は凸レンズ形または凸平形を呈する。

個体総数5点。その層位別内訳は、第I層2点(7-6-15; 8-7-12)、第II/III層1点(8-9-114)、第III層2点(6-3-79; 8-3-34)である。最大例(7-6-15)は、3.5×4.7×2.0cm、最小例(8-9-114)は、2.8×2.4×1.4cm、厚型が2点と薄型が3点であるが、全般に厚味がある。円礫製の2点は背面に原礫面を残し、角礫の3点にはみられない。

円形あるいは楕円形の輪郭をもつものは2点(7-6-15; 8-3-34)ある。前者は横に長い石核で、長軸に沿った背面調整は階段状剥離を重ねつつ、腹面に対しほぼ垂直な角度になるように施されている。この細心の調整打面から、この後目的剥片を剥取する意図であったことが読みとれる。後者の場合、その腹面の三分二ほどは偶発性の打割面のままである。石核調整の途中で放棄され、加工部は削器かチョッパーのように使用されたようである。輪郭が三角形を呈する例も2点(8-7-12; 8-9-114)ある。前者は背腹両面の区別もつけにくいほど粗末な石核で、周縁の不規則な小剥離も打面調整用なのか、それとも他の目的でつけられたものなのか判断がつかない。後者の剥離も粗く、腹面の下半部は一次打割面のままである。腹面上縁に沿って細かい使用痕が残る。またこの石核の三角錐状の背面をはしる稜線中の一末端付近には、祖型竜骨形搔器とでも称すべき形態の加工がみられる。残りの1点(6-3-79)も矩形の雑な石核で、背腹両面とも調整のごく初期段階にある。

[A-a-4-ii 及び iii-G<sub>2</sub>]

- 1) 腹面の剥離状態は粗雑で特徴に乏しく、C型・Y型・M型のいずれにも属さない。
- 2) 背面調整は半周以上に亘って施されているが、一部に未加工部を残す。
- 3) [ii] は背面中央に高く稜がはしり、横断面が三角形を呈し、[iii] の横断面は半凸レンズ形または半凸平形を呈する。

[ii] [iii] とともに1点ずつである。前者{7-7-62(図の㊸)}は第II層出土の小フリント塊製高背石核で、3.3×2.7×2.0cmを計する。楕円形の輪郭をもち、腹面の剥離痕の切り合いをみると、[B-a-1] 群の石核を再調整しようとしたものらしい。背面の一端は槌状剥離によって竜骨形搔器様の形態になっている。また腹面の一側にも粗い階段状剥離による刃部形成がみられる。後者{8-7-29(図の㊹)}は第I層出土である。5.2×4.3×2.6cm、角礫製の厚型の石核である。腹面の調整は初期段階のまま、チョッピング・ツールのように使われたかもしれない。

[A-b-4-ii-G<sub>3</sub>]

- 1) 腹面の剥離状態は粗雑で特徴に乏しく、C型・Y型・U型のいずれにも属さない。
- 2) 背面調整は部分的で、かつ両端に施されている。

3) 背面中央に高く稜がはしり、横断面が三角形を呈する。

第Ⅲ層出土の1点のみ {7-7-139 (図の㉓)}。2.9×3.4×1.9cm, フリント角礫を用いた横長・高背の石核であって、一部角張っているが、楕円形に近い輪郭をもつ。G<sub>3</sub> (両端調整) に配属したが、実質的意味は薄い。というのは、長軸に沿った片側からだけの腹面剥離は、専ら未調整面を打面として行なわれており、背面調整のうち一端の剥離加工は使用痕も混じえて、一見、祖型竜骨形搔器とでも称すべき形態をみせているからである。[ii] (高背) 類の石核は各個別々の群に配属されていても、極めて特徴的外見を共有している。

[A-b-4-iv-G<sub>3</sub> 及び G<sub>4</sub>]

- 1) 腹面の剥離状態は粗雑で特徴に乏しく、C型・Y型・U型のいずれにも属さない。
- 2) 背面調整は部分的で、両端あるいは一端に施されている。
- 3) 横断面と輪郭は不定形を呈する。

個体総数はわずか3点にすぎない。G<sub>3</sub> が1点 (8-4-84), G<sub>4</sub> が2点 {7-3-20 (図の㉔); 8-3-40} で、すべて第Ⅲ層出土である。図示例は、3.0×2.8×1.5cm, 円礫を用いた厚型石核で一側に孤状の原礫面を残している。他の2例もほぼ近い大きさの平べったい角礫製石核である。

図の㉔は背腹両面の剥離が雑なもので、どちらもヒンジ・フラクチャーになっている。背面調整剥離痕上に更に細かい剥離がみられるが、打面調整用の特別剥離にしては細かく粗雑に過ぎる。腹面の下半部には平坦な打割面がそのまま残されている。8-3-40例は矩形の比較的整った輪郭をみせる。だが、腹面の剥離は一端から試みられただけで、下半部は平滑な打割面のまま途中で放棄されている。一側が腹面に垂直な平坦面になっていて、[iii] 群に含めるべきものかもしれない。ただしこの例では、この平坦面にも調整剥離が行なわれている。打面部以外の矩形の2辺に、一辺には全体に連続した細かい使用痕が、また他辺にはそれよりやや大きく不規則な使用痕が残されていて、刃部の角度から前者が搔器として、後者が削器として用いられたと推測される。8-4-84例は不定五角形を呈し、図示例同様に背腹両面で剥離が試みられているものの、いずれもヒンジ・フラクチャーに終わっている。調整の早い段階で石核として利用することを放棄してしまったようである。

(以下次号)

後記……大学院生時代の指導教官であり、当ケウエ洞穴出土石器群の分析・研究を見守り続けて下さる現北大北方文化研究所の渡辺仁教授、多忙のなか、石器の写真撮影を快諾して下さった文学部写真室の鈴木昭夫助手、宮城県北出土石器類を前にしての意見交換により、本稿準備中に多々啓発されることがあった東北歴史資料館の岡村道雄氏には、記して感謝の意を表明いたします。

註

- 1) レバント地方の中期旧石器文化を解釈するのに、現在のところ次の3つのモデルが提唱されている。(1)F. ボルドの系統樹様進化モデル (2)D. A. E. ギャロッドやR. ヌヴィーユの直線的進化モデル (3)L. R. ビンフォードの機能論的季節活動モデルである。そして、(1)に属するJ. ペロやJ. スキナー、また(2)に属するL. コープランドやA. J. ジェリネクなどによって、当該時期の石器群がそれぞれ別途に細分されている(Bar-Yosef, 1980)。その詳細については、後日、比較研究を行う際に検討するつもりである。
- 2) 注記番号。前の2つの番号は発掘区、最後の数字は個別番号を表わす。
- 3) 経験的に厚型・薄型・超薄型に三分していた石核群を計測した結果、厚型 $\geq 0.50$ >薄型 $> 0.30 \geq$ 超薄型の数値に区分線を引くのが最良である。
- 4) 剥離痕の大きさと深さ、対応する打面と打点の状態などから一般の調整用剥離痕と区別できる。
- 5) G<sub>3</sub>群の場合、両端の調整剥離の範囲が全周の半分を越えていてもこの一群に入れてある。

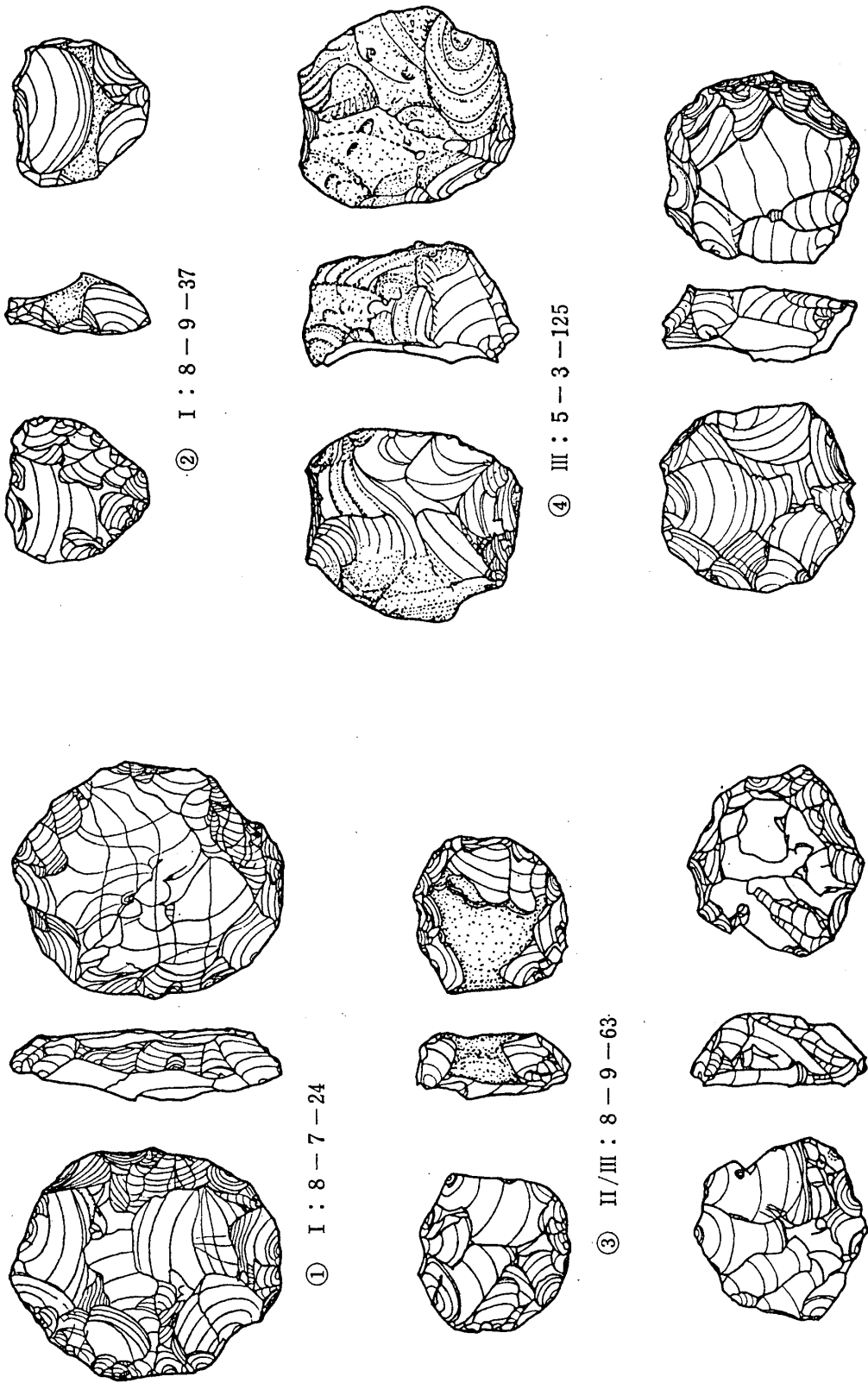
参考文献

- 安齋正人, 1977, 「ルヴァロワ技法とムステリアン技法——所謂<亀甲形石核>と<円盤形石核>に関する若干の考察——」『考古学雑誌』第63巻第2号: 61—69頁。
- 同上, 1979, 「石核分類雑考——ルヴァロワ型石核に関連して——」『考古学研究ノート』: 3—10頁, 東京大学考古学研究室。
- 岡村道雄, 1976, 「日本前期旧石器時代の始源と終末」『考古学研究』第23巻第3号: 73—92頁。
- 岡村道雄・鎌田俊昭, 1980, 「宮城県北部の旧石器時代について」『東北歴史資料館研究紀要』第6巻: 1—28頁。
- 加藤晋平, 1966, 「東シベリア・極東における旧石器・中石器時代の若干の問題」『史流』第7号: 18—32頁。
- 同上, 1967, 「日本におけるルバロワ技法の問題——星野第三地点出土遺物の位置——」『史苑』第27巻第3号: 8—17 (144—153) 頁。
- 同上, 1970, 「北アジアにおけるルバロワ・ムスチェ技法の展開——星野遺跡の石器群をめぐって——」『考古学ジャーナル』51: 2—7頁。
- 同上, 1981, 「シベリアの中期旧石器文化」『どるめん』30号: 10—18頁。
- 松沢亜生, 1979, 「石器研究における製作実験の意義——剥離面の解釈“切り合い関係”の語るもの——」『考古学ジャーナル』167: 16—19頁。
- 西部良治, 1978, 「日本におけるルバロワ型類似石核についての私論」『小林知生教授退職記念考古学論文集』: 187—196頁。
- Bar-Yosef, O., 1980, “Prehistory of the Levant”, *Annual Review of Anthropology*, vol.9, pp.101—133.
- Bordes, F., 1950, “Principes d’une Méthode d’Étude des Techniques de Débitage et de la Typologie du Paléolithique Ancien et Moyen”, *L’Anthropologie*, LIV, pp.19—34.
- , 1953, “Levalloisien et Moustérien”, *Bulletin de la Société Préhistorique Française*, Tome 50, No.4, pp.226—235.
- , 1961, *Typologie du Paléolithique Ancien et Moyen*. Bordeaux.
- Garrod, D. A. E. and D. M. A. Bate, 1937, *The Stone Age of Mount Carmel*, vol.I. Oxford.
- Marks, A. E., 1968, “The Mousterian Industries of Nubia”, in F. Wendorf, ed, *The Prehistory of Nubia*, vol.1. Dallas: Fort Burgwin Research Center and Southern Methodist Univ, Press, pp.194—314.
- , “The Halfan Industry”, pp.393—460.
- Munday, F. C., 1976, “Intersite Variability in the Mousterian of the Central Negev”, in A. E. Marks, ed, *Prehistory and Paleoenvironments in the Central Negev, Israel*. vol.1. SMU Press. Dallas. pp. 113—140.
- Suzuki, H. and I. Kobori, 1970, “Report of the Reconnaissance Survey on Palaeolithic Sites in Leba-

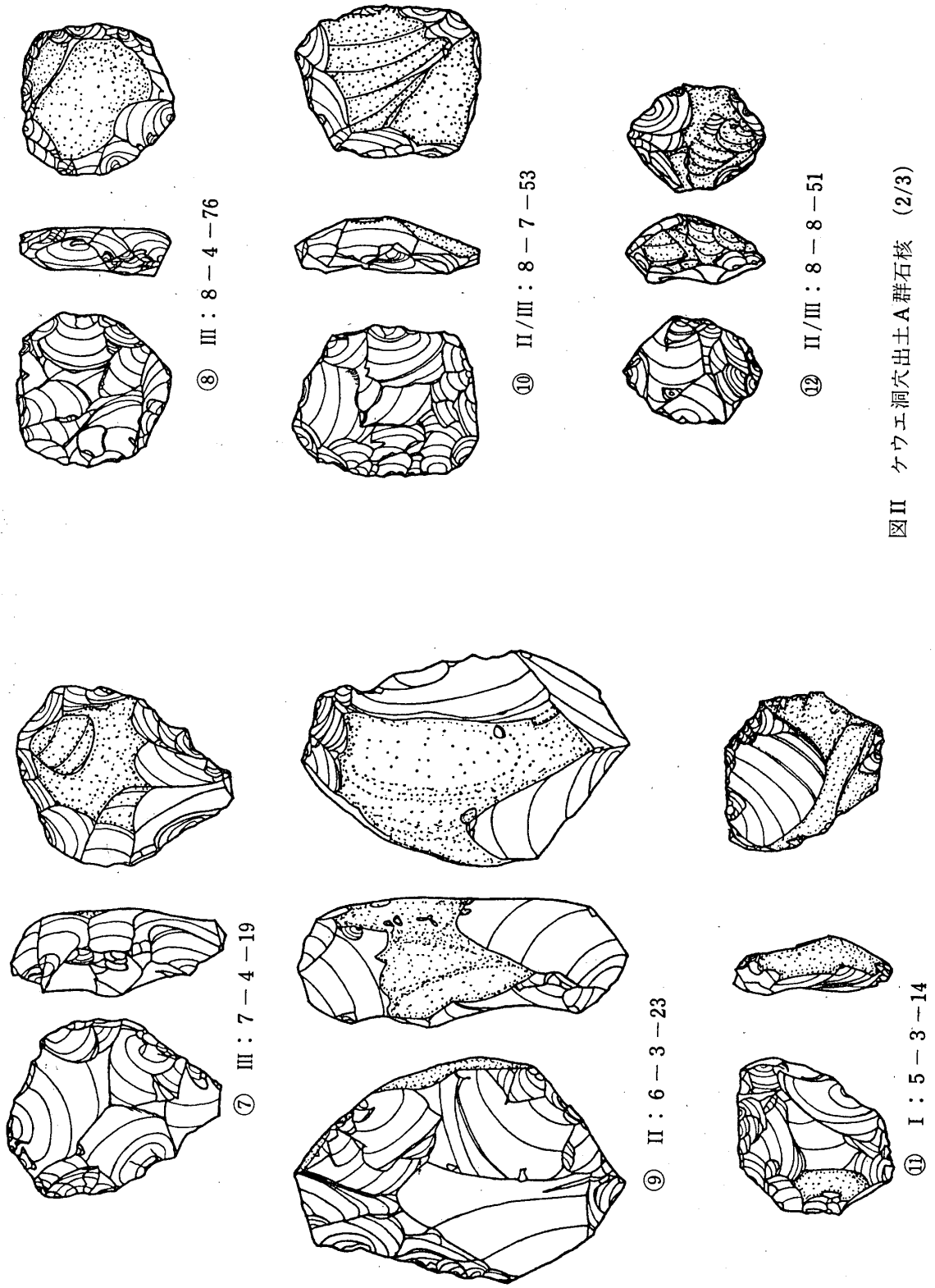
安 齋 正 人

- non and Syria", *Bulletin of the University Museum, the University of Tokyo*, No. 1.
- van Riet Lowe, C., 1945, "The Evolution of the Levallois Technique in South Africa", *Man*, XLV, pp. 49-59.
- Watanabe, H., 1970, "The Excavation of the Keoue Cave, Lebanon. Interim Report, June 1971", *Bulletin du Musée de Beyrouth*, XXIII, pp. 205-214.
- Wendorf, F., ed, 1968, *The Prehistory of Nubia*. Dallas : Fort Burgwin Research Center and Southern Methodist Univ. Press.

中期旧石器時代の剥片剥離技法

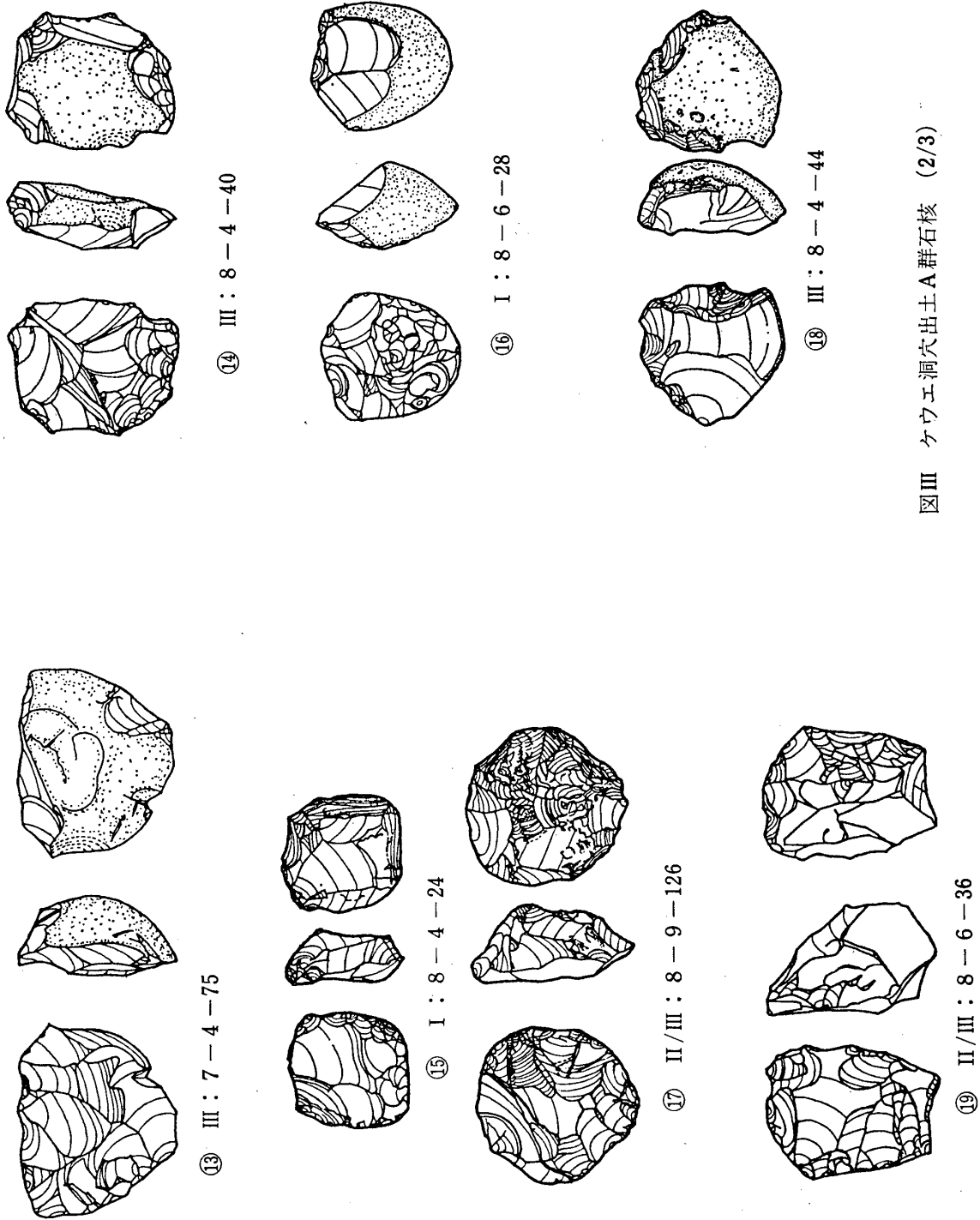


図I ケウエ洞穴出土A群石核 (2/3)

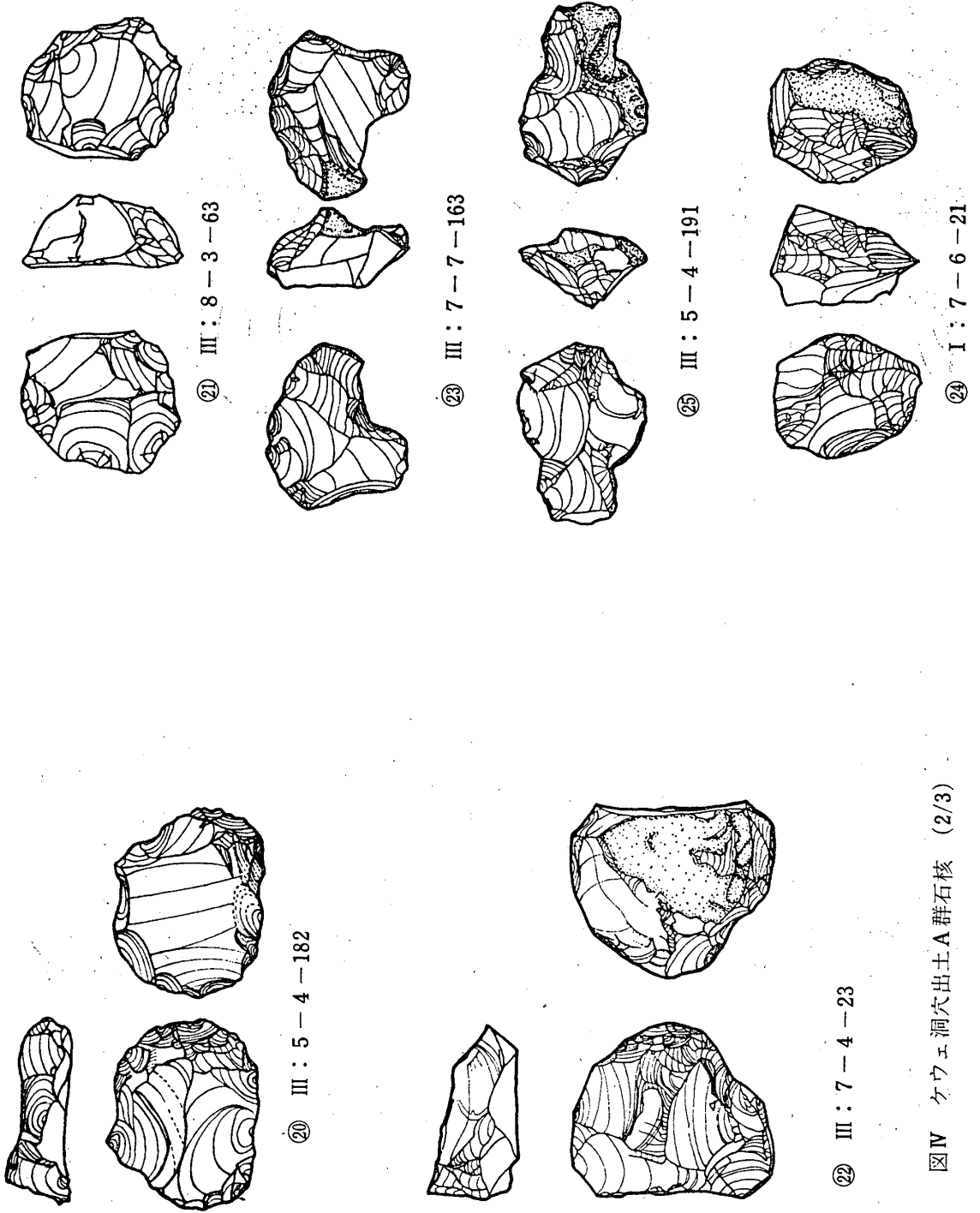


図II ケウエ洞穴出土A群石核 (2/3)





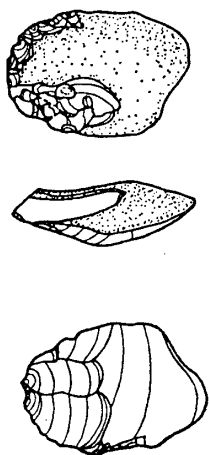
図III ケウエ洞穴出土A群石核 (2/3)



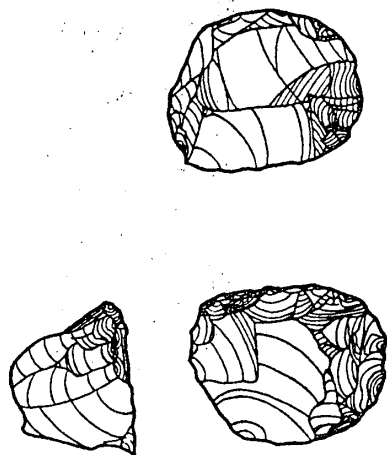
図IV ケウエ洞穴出土A群石核 (2/3)



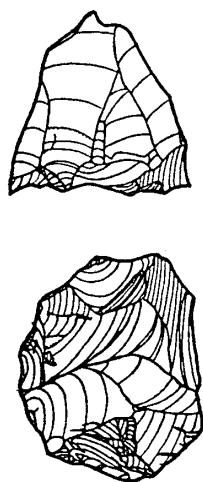
⑳ I : 7 - 7 - 34



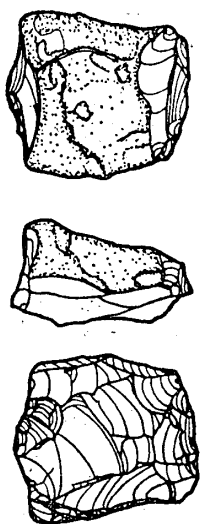
㉑ III : 7 - 6 - 93



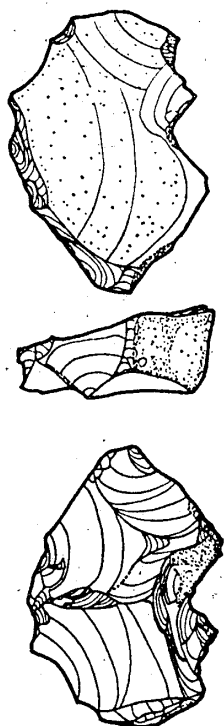
㉒ II : 7 - 7 - 62



㉓ II/III : 8 - 6 - 30

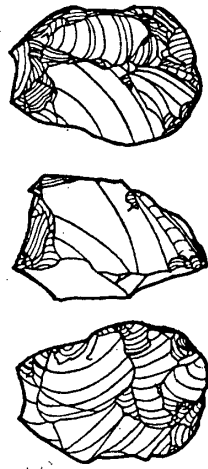


㉔ III : 6 - 3 - 67



㉕ III : 6 - 3 - 118

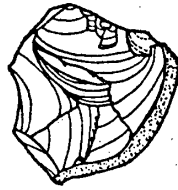
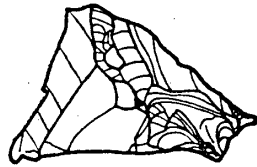
図V ケウエ洞穴出土A群石核 (2/3)



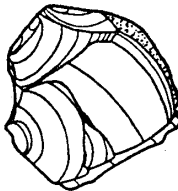
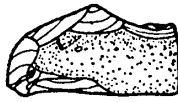
③③ III : 7 - 7 - 139



③② I : 8 - 7 - 29

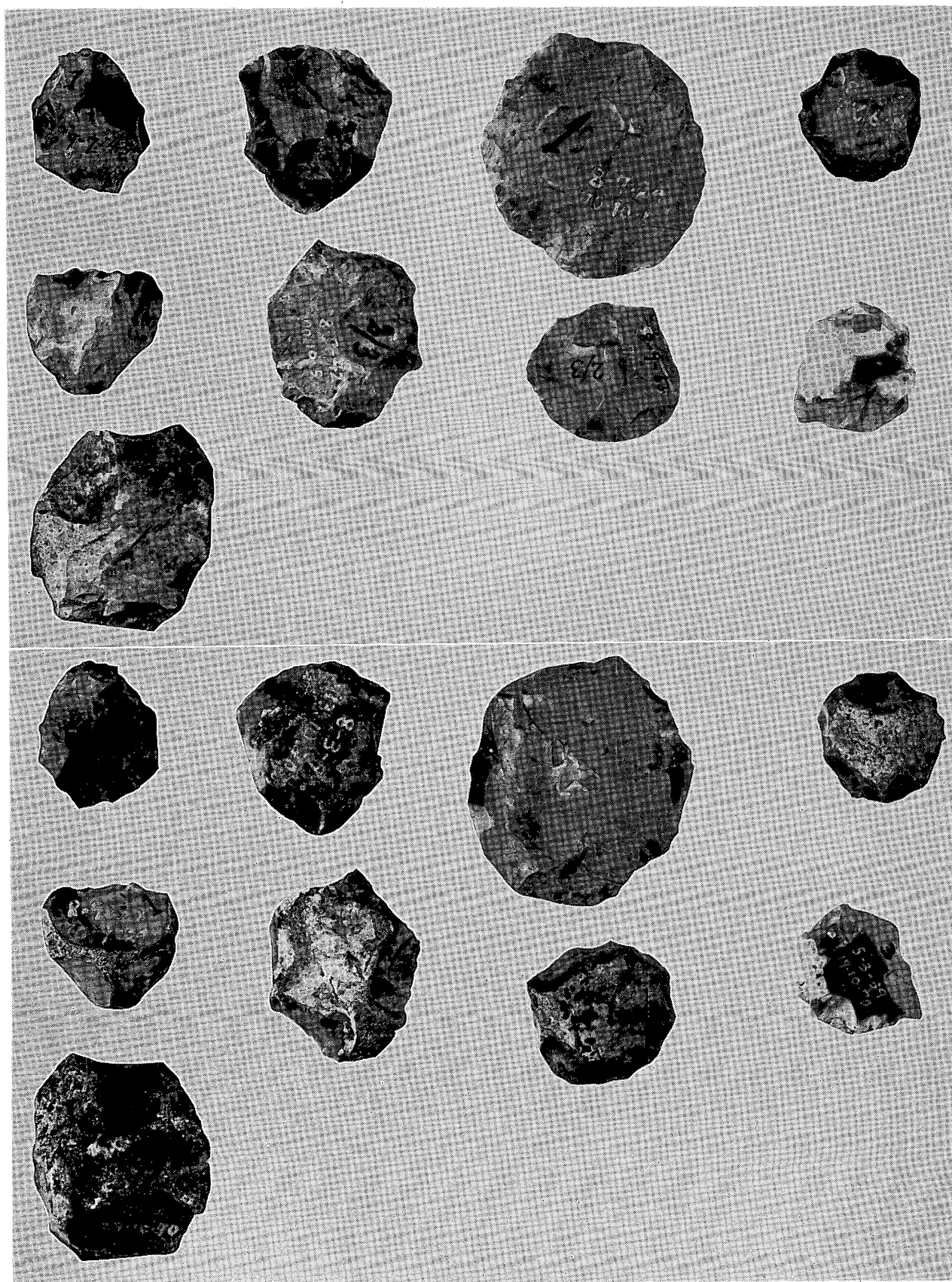


③④ III : 7 - 3 - 20



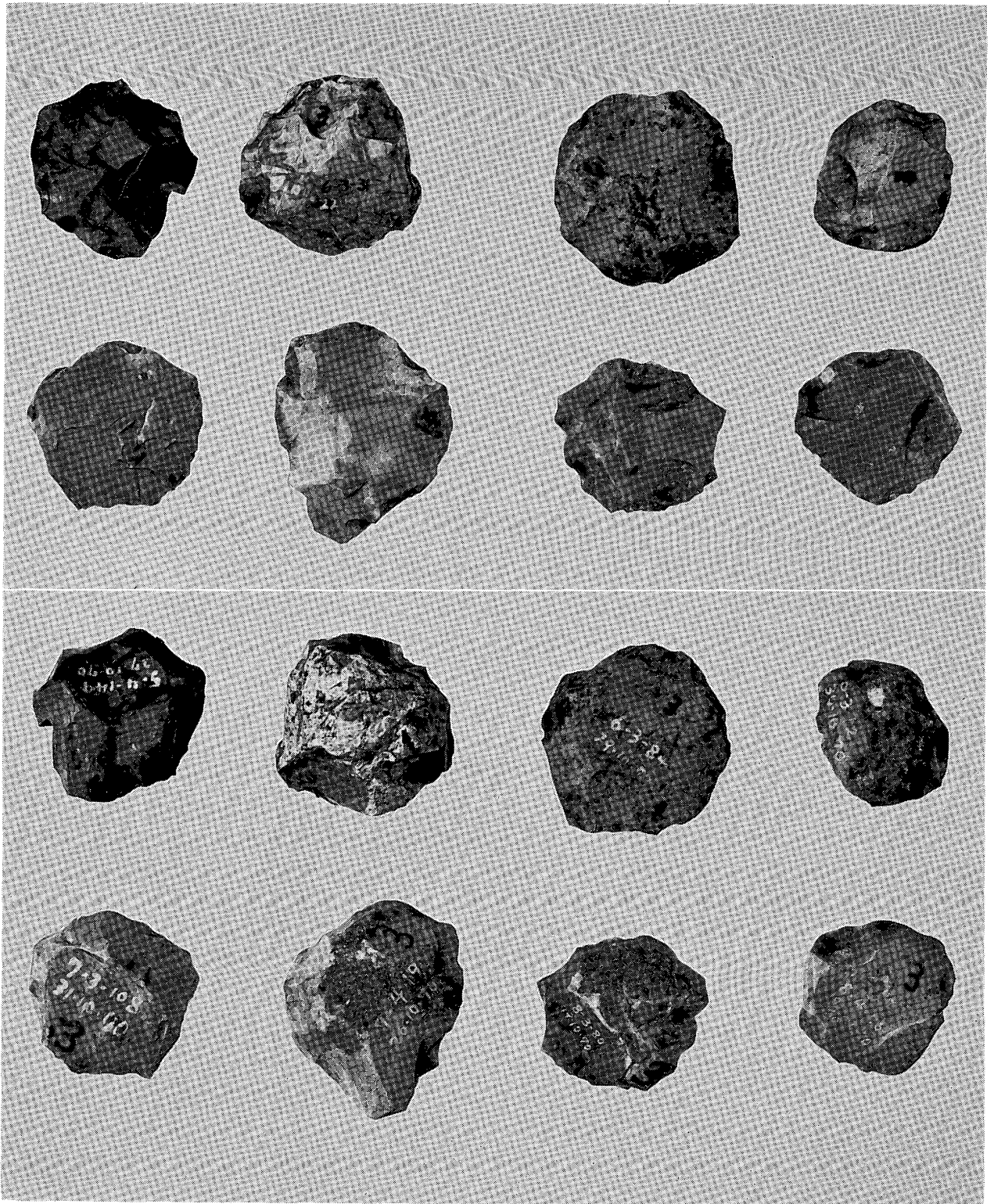
図VI ケウエ洞穴出土A群石核 (2/3)

中期旧石器時代の剥片剥離技法



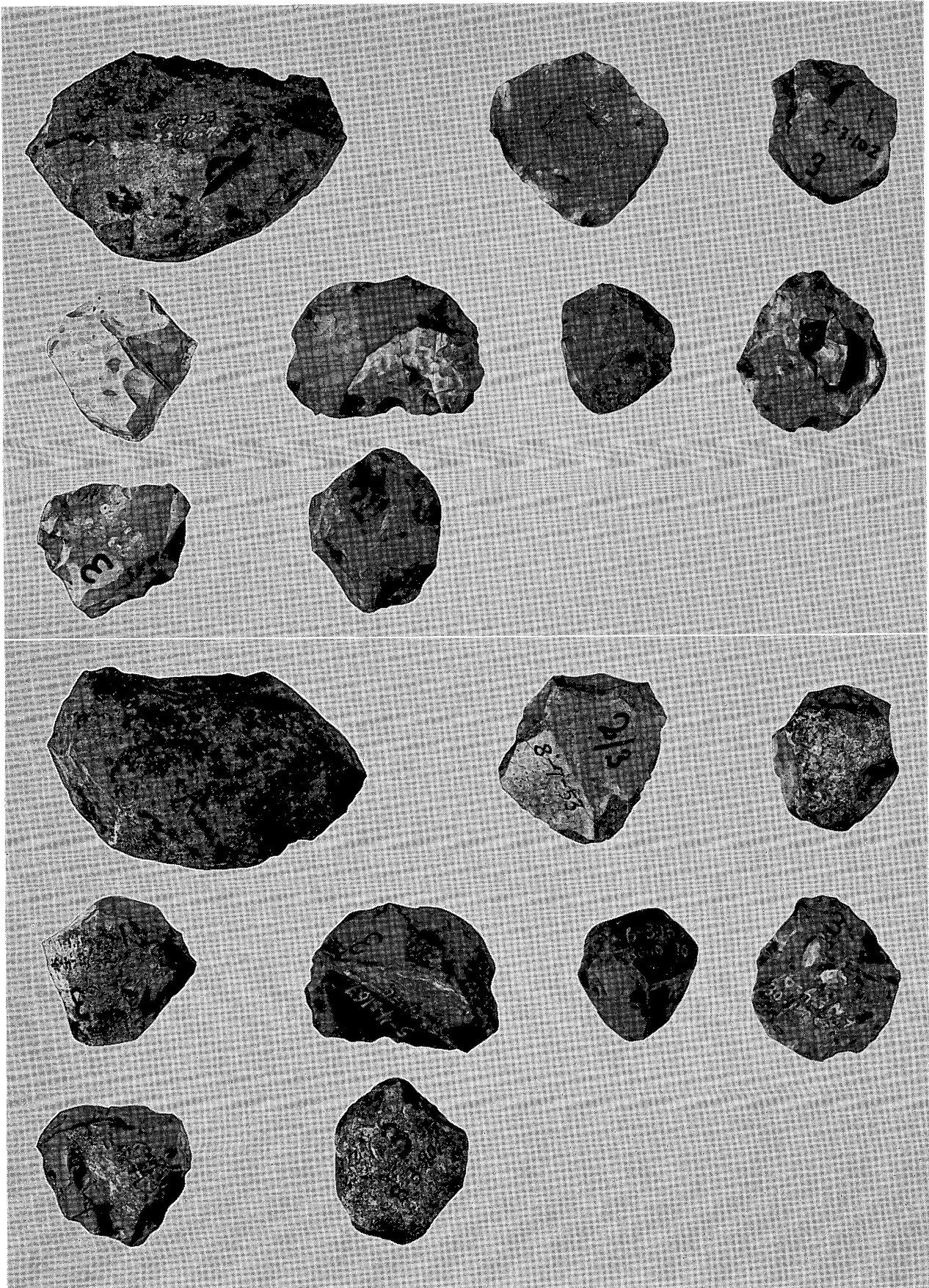
図版 I [A-a-1-i-G<sub>1</sub>] I : 7-7-43; 8-3-7; 8-7-24; 8-9-22  
8-9-37; II/III : 8-7-42; 8-9-63; III : 5-3-39  
5-3-125; 上段右端 : 2.8×2.7cm





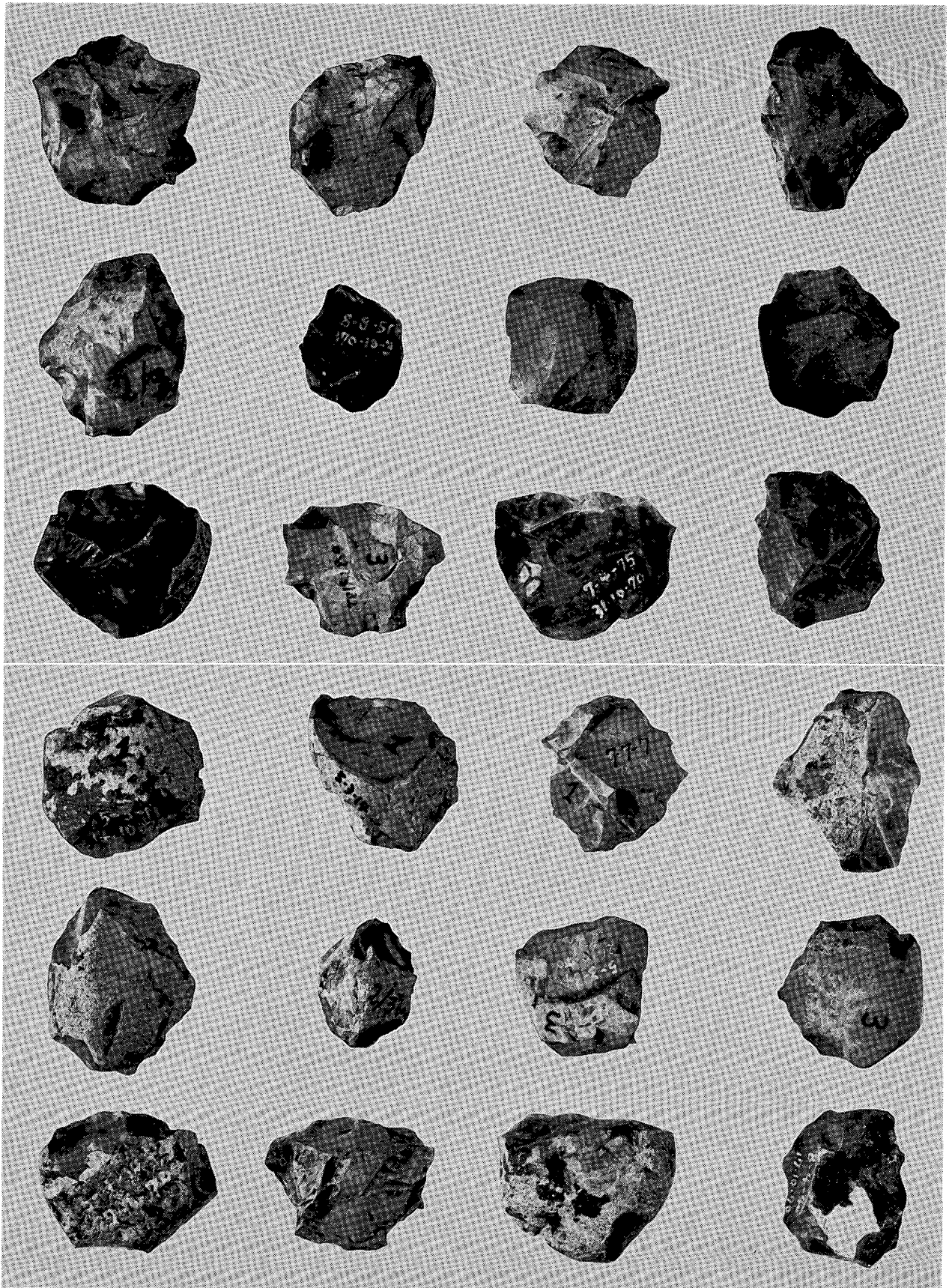
図版II [A-a-1-i-G<sub>1</sub>]Ⅲ : 5-4-149; 6-3-31; 6-3-84; 6-3-121  
7-3-108; 7-4-19; 8-3-80; 8-4-76  
上段右端 : 3.1×2.7cm

中期旧石器時代の剥片剥離技法



図版Ⅲ [A-a-1-i-G<sub>2</sub>]Ⅱ：6-3-23；Ⅱ/Ⅲ：8-7-53；Ⅲ：5-3-102  
 5-4-34；5-4-167；6-3-134；6-4-159  
 7-3-50；8-3-90 上段右端：3.2×3.0cm





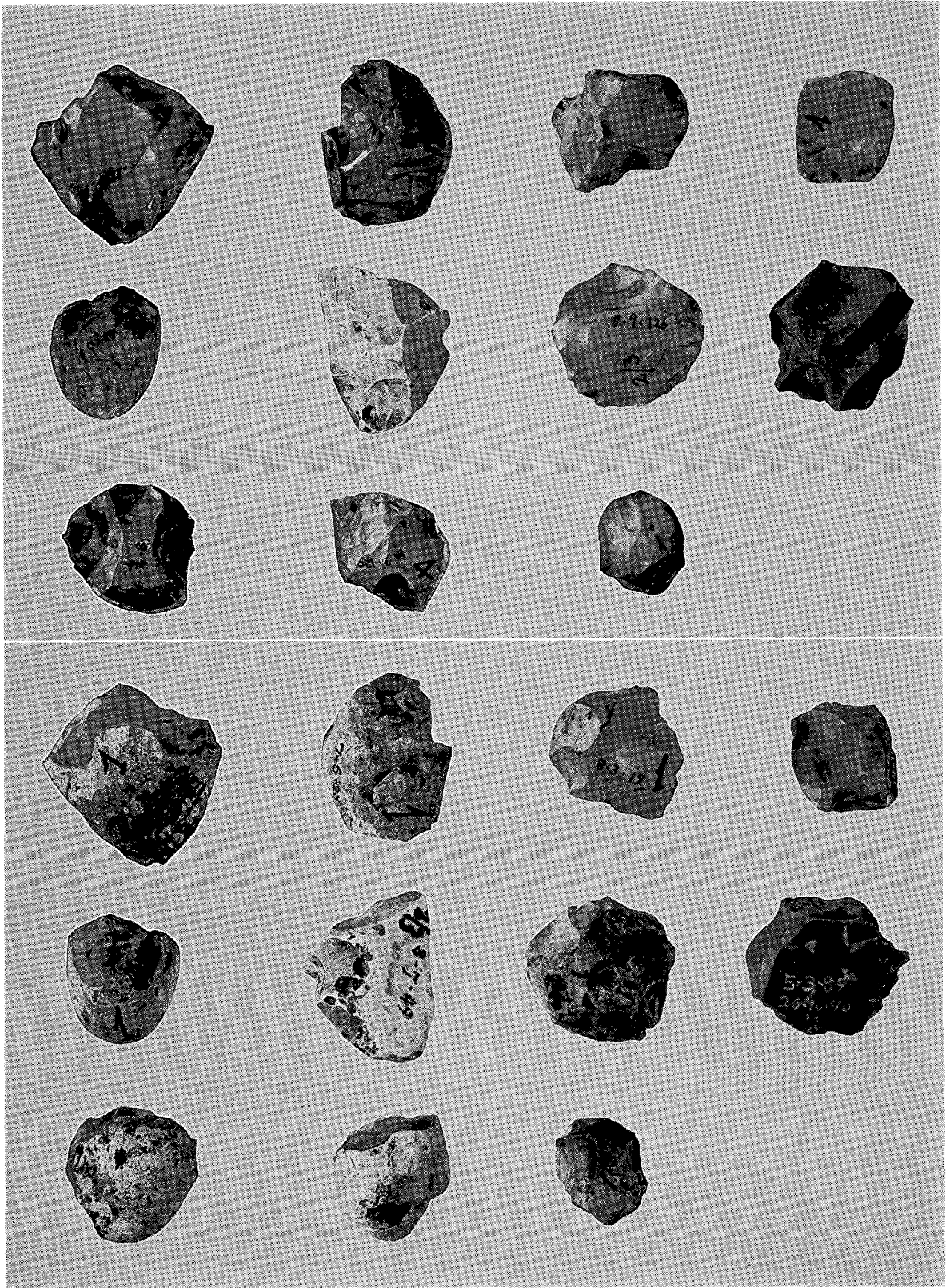
図版Ⅳ [A-b-1-i-G<sub>3</sub>] I : 5-3-11; 5-3-14; 7-7-7; II : 7-6-69

II/III : 8-8-48; 8-8-51; III : 5-3-64; 5-3-66

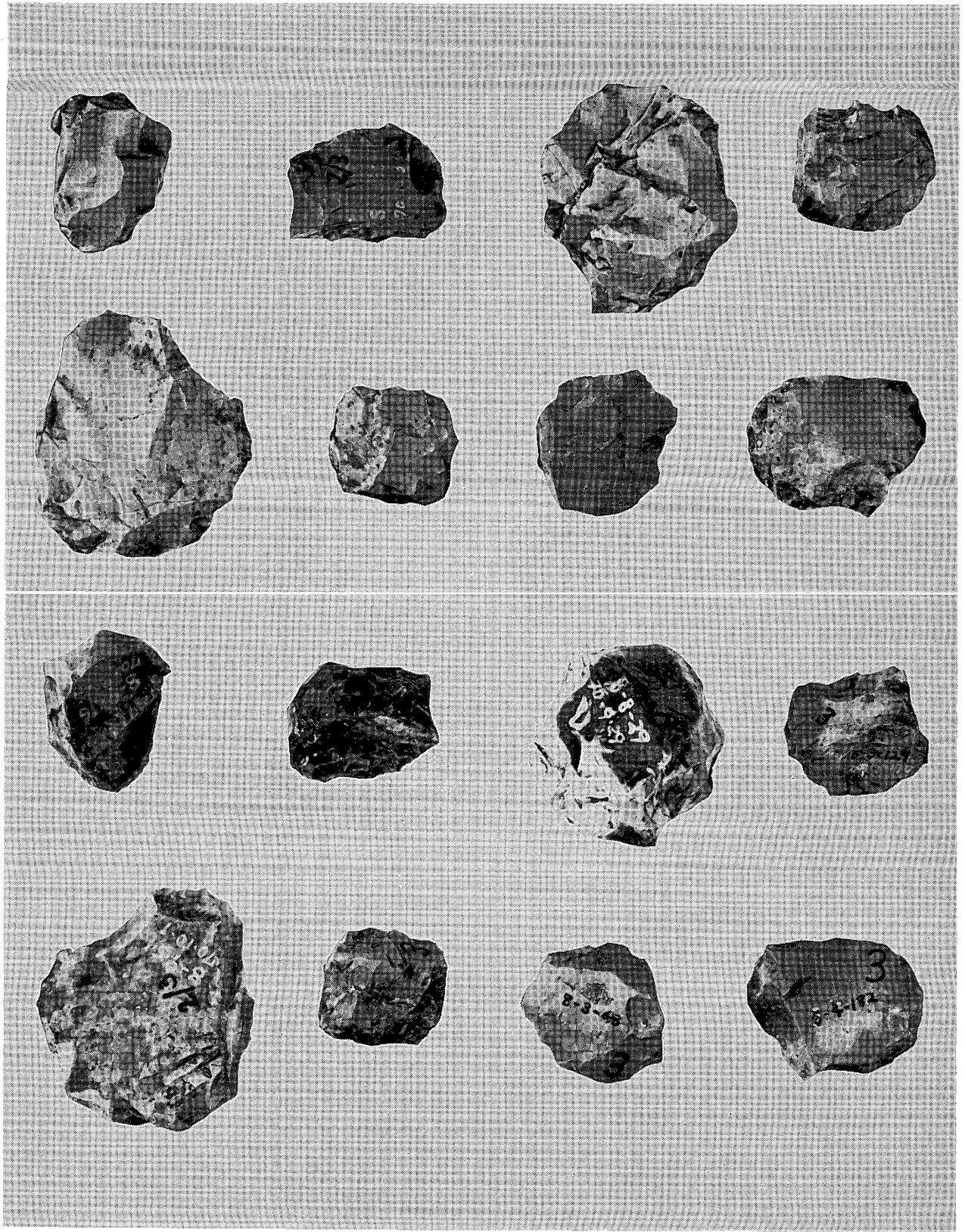
5-4-144; 6-3-132; 7-4-75; 8-4-40 上段右端 : 3.9×3.1cm



中期旧石器時代の剝片剝離技法



図版V [A-b-1-i-G<sub>i</sub>] I : 7-4-4; 7-6-28; 8-3-19; 8-4-24  
8-6-28; II/III : 8-7-49; 8-9-126; III : 5-3-89  
8-4-44; IV : 8-9-130; 8-9-133 上段右端 : 2.8×2.5cm



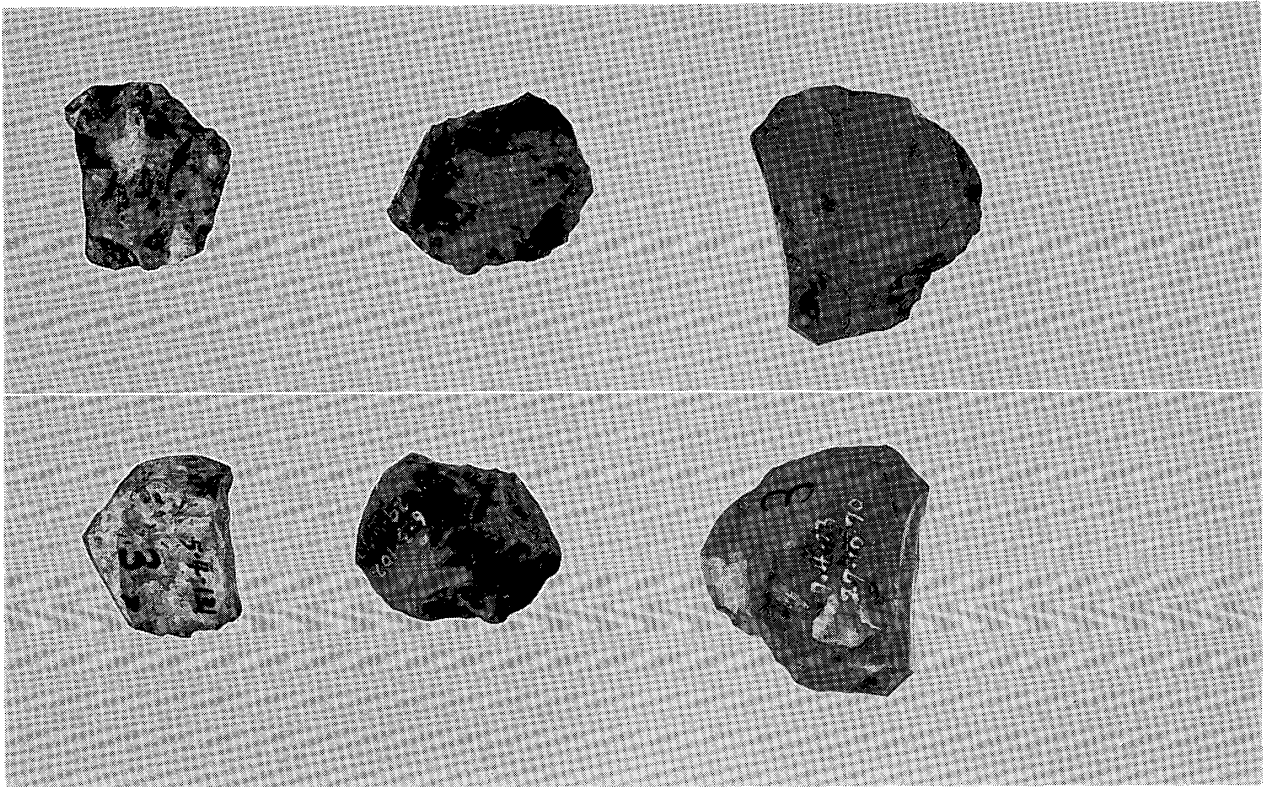
図版Ⅵ [A-a-1-ii-G<sub>2</sub>] I : 8-9-16; II/III : 8-6-36 [A-a-1-ii-G<sub>1</sub>] I : 8-8-29; III : 5-3-129

[A-a-1-iii-G<sub>2</sub>] II/III : 8-9-51; 5-4-180; 8-3-63 [A-a-1-iii-G<sub>1</sub>] III : 5-4-182

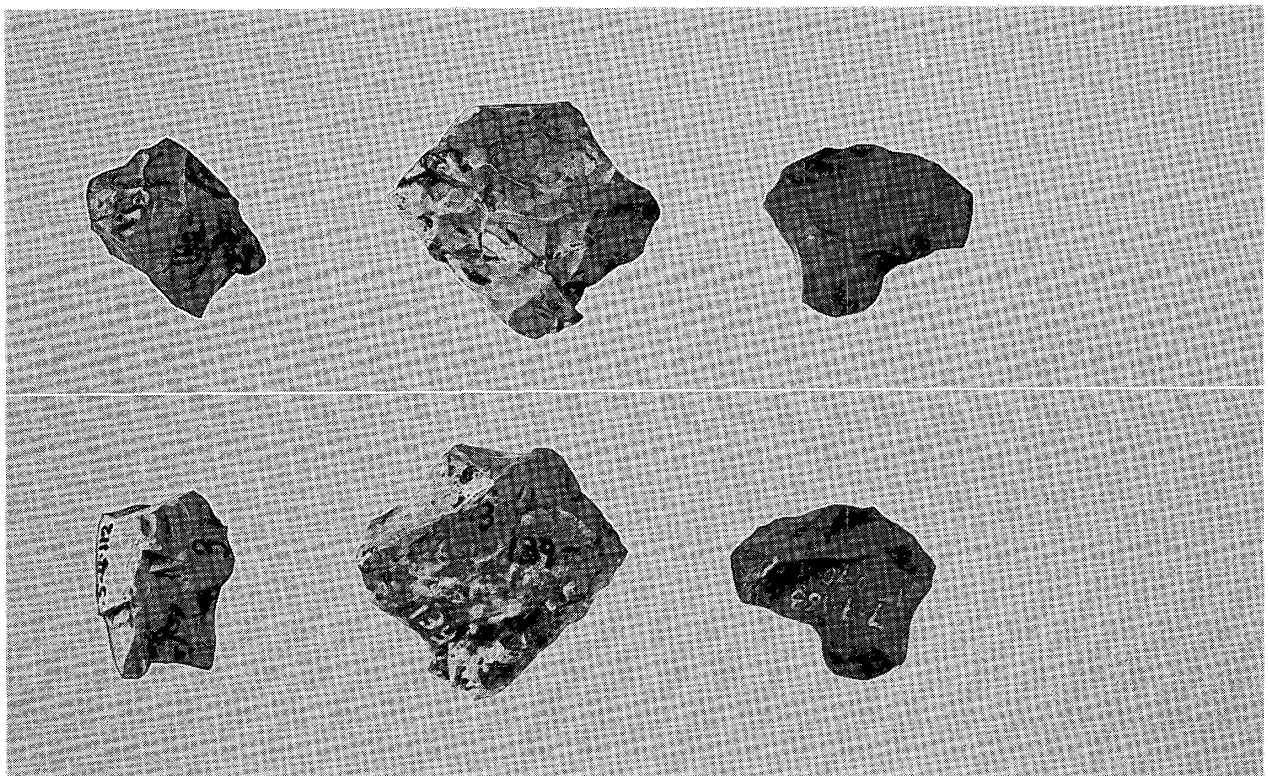
上段右端 : 2.8×2.7cm



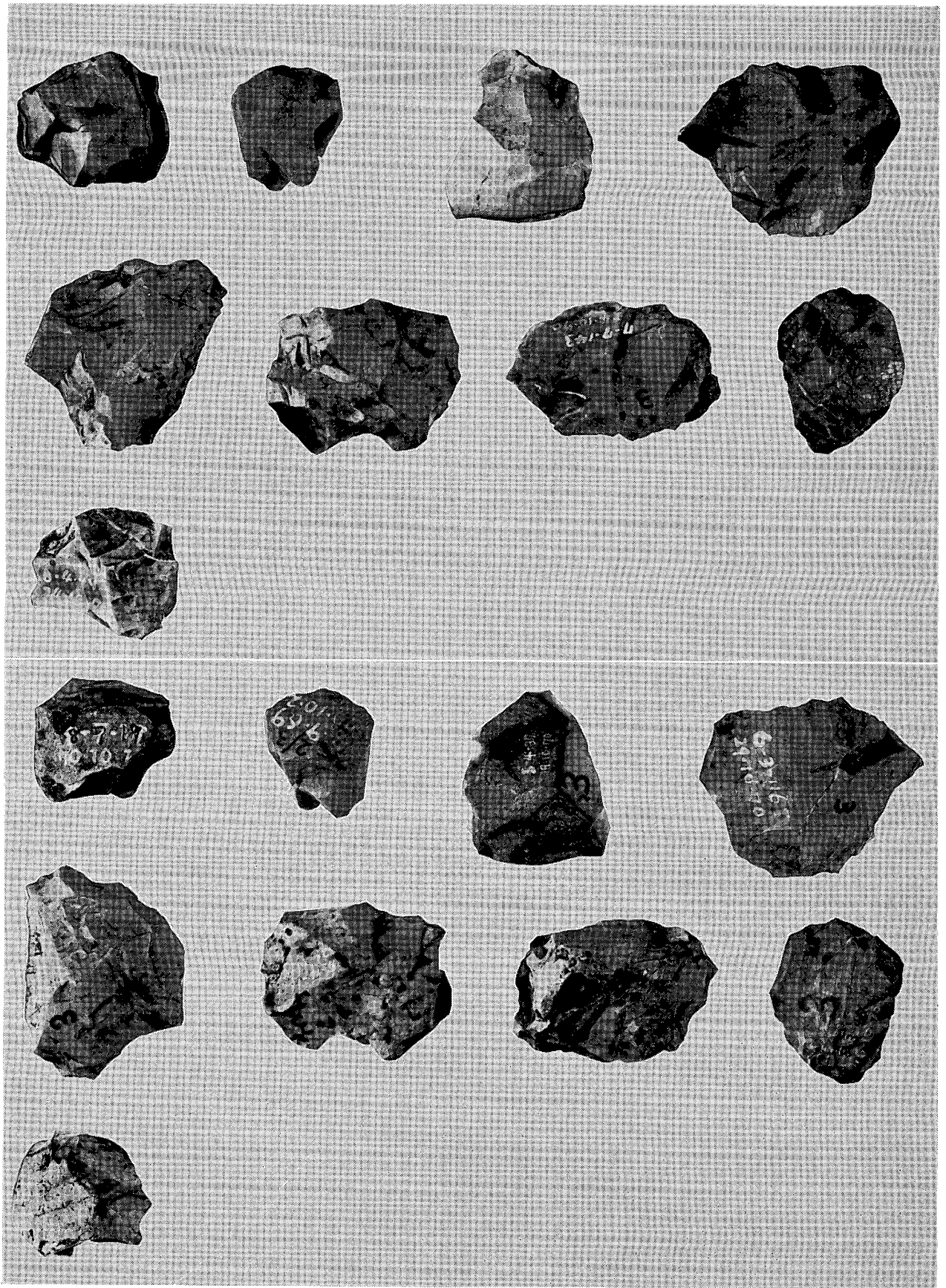
中期旧石器時代の剝片剝離技法



図版Ⅶ [A-b-1-iii-G<sub>4</sub>]Ⅲ : 5-4-131 [A-b-1-iii-G<sub>3</sub>]Ⅲ : 6-3-102; 7-4-23  
右端 : 4.1×3.5cm



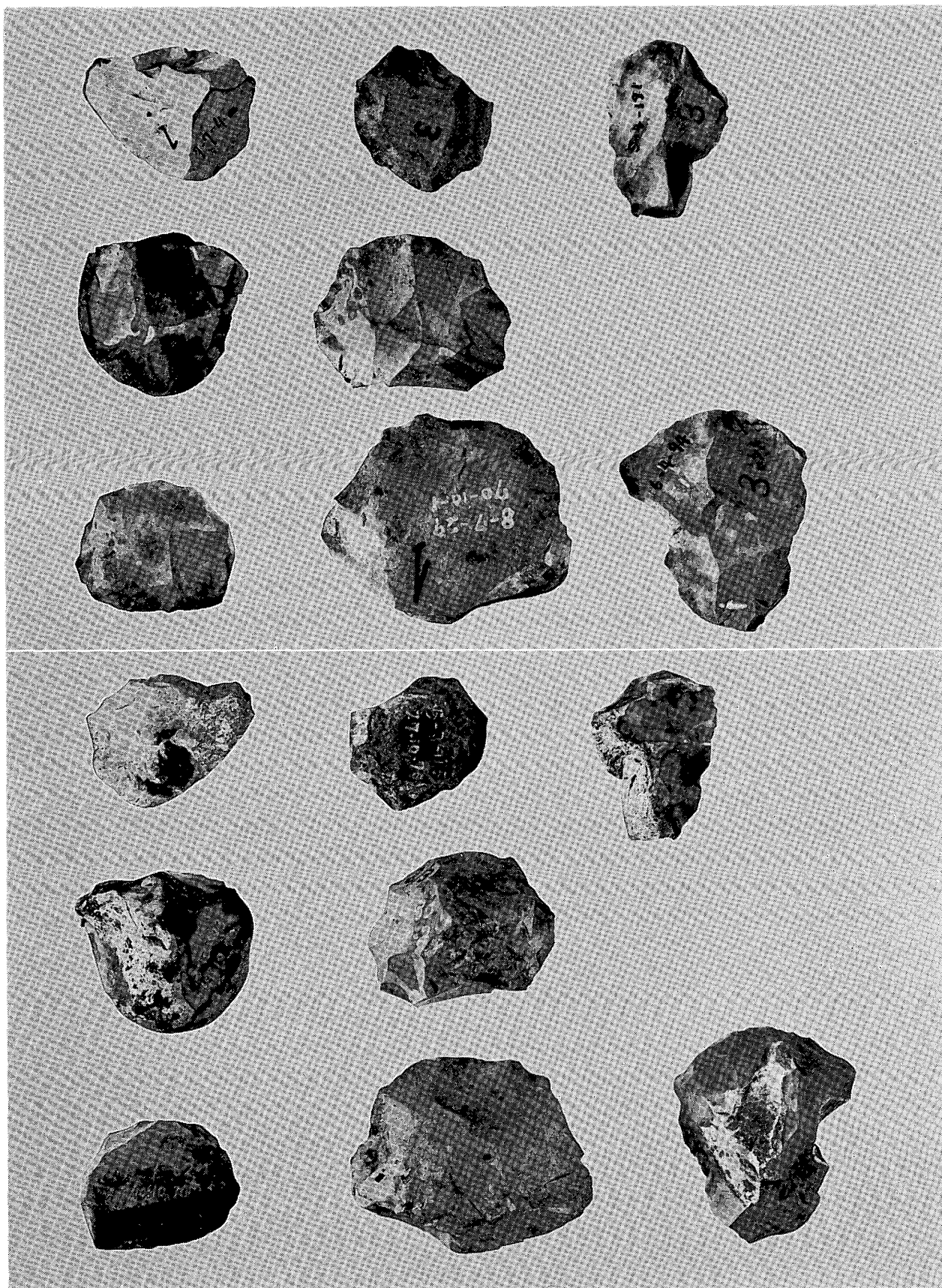
図版Ⅷ [A-b-1-iv-G<sub>4</sub>]Ⅲ : 5-4-112; 6-4-139; 7-7-163  
右端 : 2.9×3.3cm



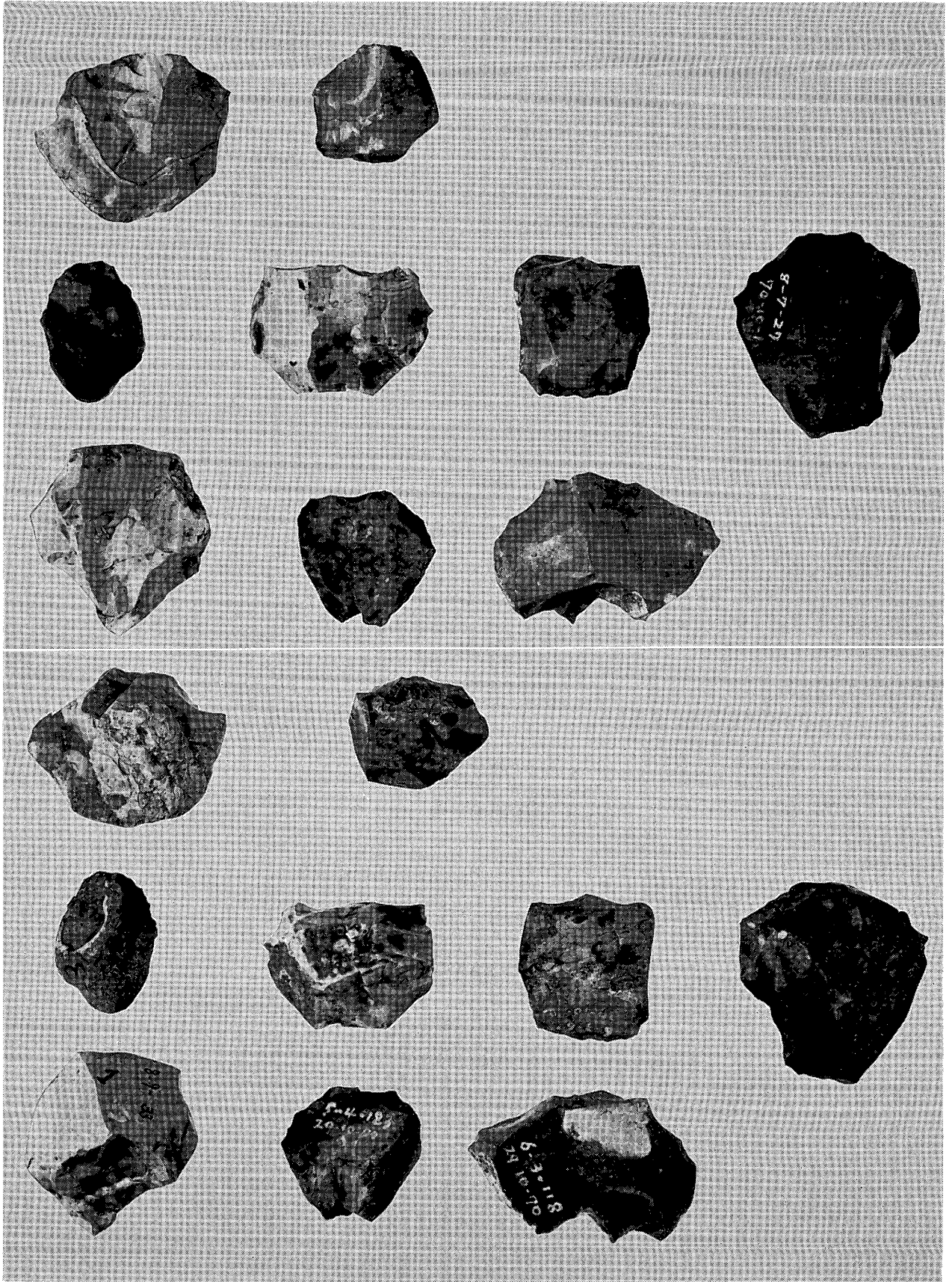
图版 IX [A-a-1-iv-G<sub>2</sub>] I : 8-7-19; II/III : 8-9-69; III : 5-4-37; 6-3-116  
6-4-134; 7-4-16; 7-7-143; 8-3-45  
[A-a-1-iv-G<sub>1</sub>] III : 6-4-49 上段右端 : 4.5×3.9cm



中期旧石器時代の剥片剥離技法



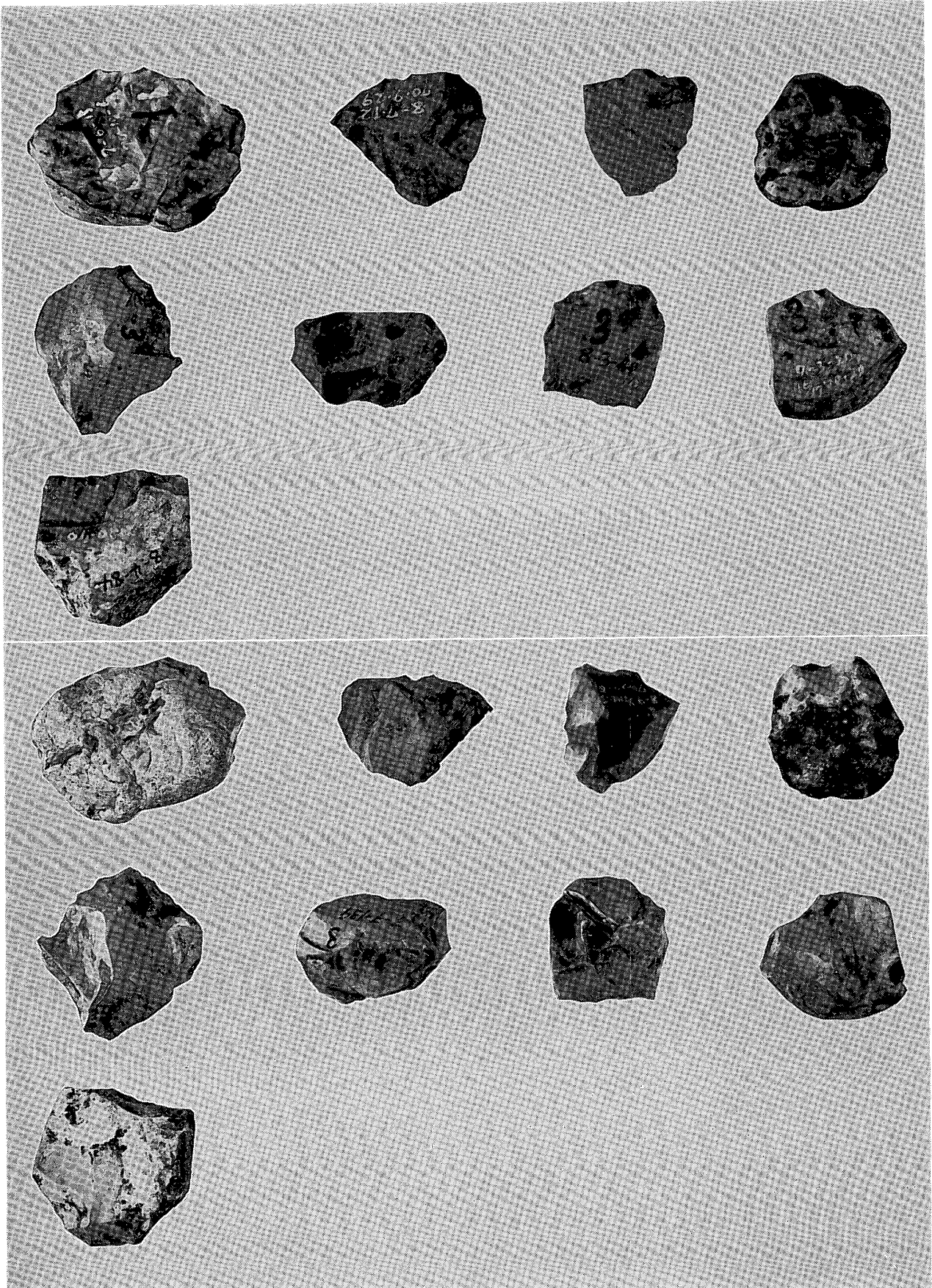
図版 X [A-a-2-i-G<sub>2</sub>] I : 7-7-4; III : 5-3-115 [A-a-2-iv-G<sub>2</sub>] III : 5-4-191 上段右端 : 3.7×2.5cm  
 [A-a-3-i-G<sub>2</sub>] III : 5-3-23 [A-a-3-ii-G<sub>2</sub>] II/III : 8-6-30  
 [A-a-4-ii-G<sub>2</sub>] II : 7-7-62 [A-a-4-iii-G<sub>2</sub>] I : 8-7-29 [A-a-4-iv-G<sub>1</sub>] III : 6-4-94



図版 XI [A-b-2-i-G<sub>4</sub>] I : 8-9-25 [A-b-2-ii-G<sub>4</sub>] I : 7-6-21 上段右端 : 2.5×2.9cm  
[A-b-3-i-G<sub>1</sub>] III : 7-6-93 [A-b-3-i-G<sub>3</sub>] I : 7-7-34 ; III : 6-3-67 ; I : 8-7-27  
[A-b-3-ii-G<sub>4</sub>] I : 8-9-33 [A-b-3-iii-G<sub>4</sub>] III : 5-4-183 [A-b-3-iv-G<sub>4</sub>] 6-3-118



中期旧石器時代の剥片剥離技法



図版Ⅻ [A-b-4-i-G<sub>4</sub>] I : 7-6-15; 8-7-12; II/III : 8-9-114; III : 8-3-34  
 6-3-79[A-b-4-ii-G<sub>3</sub>] III : 7-7-139[A-b-4-iv-G<sub>4</sub>] III : 8-3-40; 7-3-20  
 [A-b-4-iv-G<sub>3</sub>] III : 8-4-84 上段右端 : 3.3×3.2cm